

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.99
2007

10
月号

トピックス

大阪大学・大阪外国語大学統合記念式典開催

クローズアップ

世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラムに採択

ー大阪大学免疫学フロンティア研究センターー



大阪大学広報誌

2007 10月号

No. 99

目 次

トピックス	2
役員室だより	8
クローズアップ	20
キャンパスニュース	24
計 報	43
表 彰 等	44
人 事	46
名誉教授リレー随想	50
インフォメーション	52
ガイドマップ	59
留 学 生	60
交流協定大学	62
クラブ&サークル	63
トピックス	64

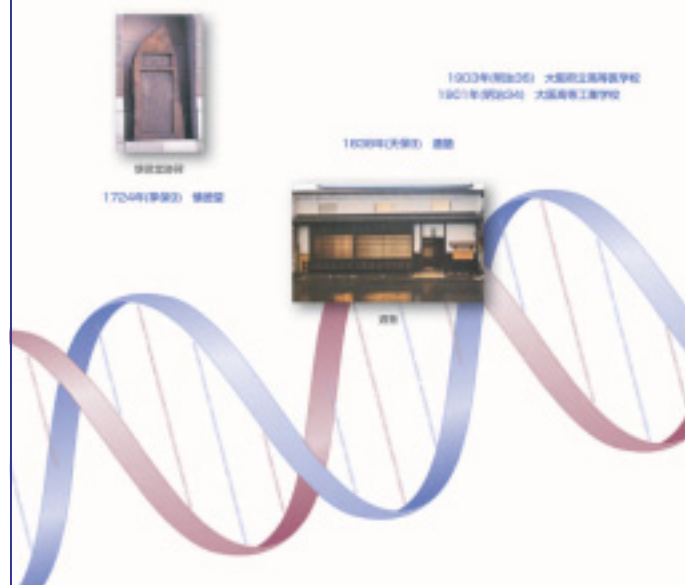
表 紙：統合シンボルマーク
表紙デザイン：株式会社ココティエ

大阪大学・大阪外国語大学

平成19年10月1日、リーガロイヤルホテルにおいて、
大阪大学・大阪外国語大学統合記念式典を挙行了しました。

式典には、文部科学省をはじめ、国立大学協会、地方
公共団体、財界等の方々関係者約500名が出席されました。

二つの遺伝子が一つになって、
新しい知を創造します。



トピックス

式典では、鷲田清一総長が、両大学の歴史を振り返りながら、「両大学とも市民の熱い志によって建学されたという歴史があります。歴史的な意義と縁が感じられる」と新たな「大阪大学」の誕生について力強く式辞を述べました。（総長式辞は6～7ページ参照）

引き続き、渡海紀三朗文部科学大臣の「グローバル社会の中、必要な人材養成をめざす両大学の統合は非常に有意義なものであり、世界の冠たる総合大学としての地位と評価を得られるよう発展を祈ります」との祝辞を玉井日出夫文部科学審議官が、小宮山 宏国立大学協会会長（東京大学総長）の「新たな高等教育の歴史に輝かしい1ページを刻まれることを祈ります」との祝辞を尾池和夫理事（京都大学総長）が代読しました。



玉井文部科学審議官



尾池国立大学協会理事

海外の学術交流協定校からも、マヒドン大学（タイ）のポンチャイ・マタンカソムバット学長をはじめ、多数の大学学長らが出席され、一人ずつ紹介されました。

また、式典では、本学混声合唱団による大阪大学学生歌などが披露され、門出を祝いました。

式典の最後には、この統合を機に、広く内外にこの統合をアピールする意味も込め、統合記念シンボルマークを定め、その披露も合わせて行われました。



引き続き行われた祝賀会では、鷲田総長が「大阪大学ではこれまで女子学生の数は約4分の1でしたが、今回の統合で38%に増えます。学内の空気も変わるのではないのでしょうか」と挨拶して、その場を和ませた後、金森順次郎元大阪大学総長、池田 修元大阪外国語大学学長から祝辞があり、この統合に尽力された宮原秀夫前大阪大学総長、是永 駿前大阪外国語大学学長により乾杯の発声が行われました。

宮原前総長は「歴史も伝統も違う両大学で困難はありましたが、お互いの大学のない部分を補完しあう、そのような融合ができました。関係者の皆様に感謝申し上げます」と挨拶を述べられました。

また、本学応援団・チアリーダーによる演舞も行われ、祝賀会に花をそえました。



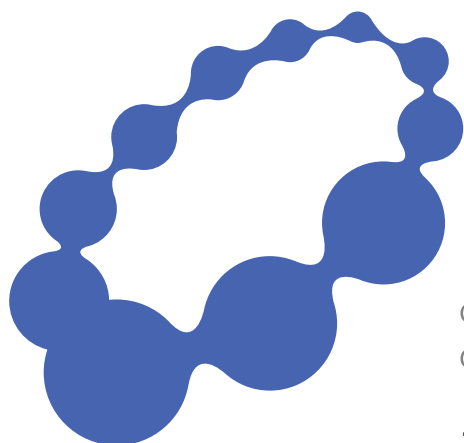
宮原前総長（左）と是永前学長（右）



金森元総長



大阪大学・大阪外国語大学統合シンボルマーク制定



シンボルマークのコンセプト

個々の球体は外国語学部を加えた11の学部を表現しています。大阪大学と大阪外国語大学が統合によってつながった一つの環となり、それはまた「和」にもつながることを意図しています。つながった環はOSAKA UNIVERSITYの頭文字の「O」を表しています。色は大阪大学のユニバーシティカラーであるスカイブルーを基調にしています。

OSAKA UNIVERSITY

OSAKA UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

2007.10.1 INTEGRATION

学外に統合と新生大阪大学をイメージづけるとともに、教職員・学生、大学生協などの学内構成員に広く愛用してもらうこととしています。

（シンボルマークの使用基準については、大阪大学ポータルに掲載しています。）

大阪大学・大阪外国語大学統合記念式典式辞

本日、大阪という地を拠点としてきた二つの国立大学法人、大阪大学と大阪外国語大学がここに統合いたしました。

両大学は、それぞれに長い教育・研究の伝統をもちながらも、ともに市民の厚い支援によって建学されたという創立の事情において共通するところがあります。

わたしは、この両大学が一つの大学になったことに歴史的な意義と不思議な縁（えにし）を感じずにはいられません。

さて、大阪外国語学校モンゴル語部の卒業生である司馬遼太郎氏は、その著『花神』の冒頭で次のような文章を綴っています。

「適塾」という、むかし大坂の北船場にあった蘭医学の私塾が、因縁からいえば国立大阪大学の前身ということになっている。宗教にとって教祖が必要であるように、私学にとってもすぐれた校祖があるほうがのぞましいという説があるが、その点で、大阪大学は政府がつくった大学ながら、私学だけがもちうる校祖をもっているという、いわば奇妙な因縁をせおっている。

懷徳堂と適塾の精神を受け継ごうとした大阪帝国大学の創設には、大阪の政財界と市民の、大学設置への切なる期待が込められていました。そして1931年（昭和6年）大阪大学は、民間からの厚い支援に助けられつつ、理学部、医学部からなるわが国六番目の帝国大学として、大阪中之島の地に創設されました。その後大阪工業大学、さらには大高、浪高などを統合し、昭和24年、新制・大阪大学として再スタートをきり、現在まで10学部、15研究科からなる総合大学として発展してまいりました。

他方、大阪外国語大学の創設も、当時の大阪の実業家・林蝶子氏が「大阪に国際人を育てる学校を」という強い篤志の下、私財100万円を政府に寄附し、設立に至ったという経緯があります。そして1921年（大正10年）大阪上本町の地に9語部からなる大阪外国語学校として創立され、昭和24年以後は、大阪外国語大学として設置され、外国語教育の西の雄として大きく発展してまいりました。

このように両大学の成り立ちにはきわめて似通ったいきさつがあります。そして長らく大阪市の北と南で並び立ってきた両大学は、その後、相次いでその拠点を北摂の地に移し、現在に至っています。

さて、本日、大阪大学は大阪外国語大学と統合し、新しい「大阪大学」として生まれ変わりました。大阪大学は、大阪外国語大学という、長きにわたって多彩な外国語教育を展開してきたこの大学と統合することで、「地域に生き世界に伸びる」というモットーに集約される、教育・研究・



社会連携の三つの使命を、さらに大きく飛躍させる確かな礎をここに得ました。

このたびの統合がめざしているもの、その第一は、大阪大学の高度で多彩な専門的学術研究・教育のシステムと、大阪外国語大学の多彩な外国語教育のプログラムとを組み合わせることで、たとえば、現地語で調査やフィールドワークのできる社会学者や国際機関職員を、あるいは現地語で話し、聴くことのできる医療従事者など、真に国際的な人材を養成するということです。これは、高度な専門研究・教育を担っている総合大学と、24の多彩な外国語教育を担ってきた単科大学の統合によってはじめて可能になることです。全国で唯一、外国語学部と世界諸言語の研究センターをもつ国立大学法人として、大阪大学は今後、全国にも類を見ない新しい教育・研究に取り組んでいくことになります。

次にめざすところは、全学共通教育、なかでも外国語教育の充実です。これまでの総合大学では、入学後に学ぶ外国語といえば、まず第一に英語、第二外国語としてはドイツ語、フランス語のほかにごく限られた外国語がつけ加わる程度でした。新しい大阪大学の全学共通教育では、第二外国語の選択範囲が、ドイツ語、フランス語のほかに、スペイン語、イタリア語、ロシア語、中国語、朝鮮語へと広がります。さらに専門課程、大学院へと進学すれば、それぞれの専門領域の学習と並行して、第3外国語として24の世界の地域語を学ぶことができるようになります。このことで、将来つくることのできる職種や社会活動の範囲が大きく広がりますし、またそうした将来の仕事を見据えた自己教育を早くから開始できるようになります。

第三に、わたしたちが「足もとの国際化」と呼ぶ地域貢献の重層化ということがあります。進行するマルチカルチュラルな社会のなかで、わたしたちは、外国人研究者・就労者とその家族が健やかに安心して住める地域社会づくりを推進しなければなりません。医学研究科や高等司法研究科の教員と旧外国語大学の教員が協力して、病気をしたときもトラブルに巻き込まれたときも的確に仲介してくれる医療通訳や司法通訳を養成するとともに、外国人児童の教育支援をおこなう専門家とボランティアを養成することが、この統合によって可能になります。また、海外に企業拠点をもつ、あるいは海外から外国人就労者を招聘する関西企業の国際交流の支援などにも、今後は本格的に取り組むことができるようになります。

そして最後に、この統合を機に、大阪大学は、近隣にある国際研究・協力の機関である国立民族学博物館や国際協力機構（JICA）とさらなる連携を深めることで、北摂地域一帯が、バイオ研究の拠点としてと同時に、国際協力における知的集積度のきわめて高いエリアとして、全国に強烈な存在感を示せるようになります。

両大学が、以上のようなヴィジョンをもって、ここに統合という、両大学にとって歴史的な大事業をなしえたこと、その第一歩は、平成16年春の国立大学法人化に際し、宮原秀夫前大阪大学総長と是永駿前大阪外国語大学学長が両大学の「統合」を決意し、その推進に向けての本格的な検討を指示されたことに始まります。そしてそれから三年半、大学としての文化も組織形態も異なる二つの国立大学法人の統合は、ご想像のとおり平坦な道ではありませんでした。けれども、両大学教職員のねばり強い努力と、そしてなによりも両大学の教育・研究・社会連携の事業をさらに充実させたいという熱い思いとによって、本日、ここにようやく、「統合」を記念する式典を迎えるに至りました。



この記念すべき式典は、言うまでもなく両大学のさらなる飛躍を祝すものであり、また新生・大阪大学への大阪外国語大学の生まれ変わりを祝すものでありますが、この記念すべき日は同時に、86年の伝統をもつ「大阪外国語学校・大阪外国語大学」の名が消える日でもあります。その言い

尽くせぬ寂しさを、大阪外国語大学の当事者は言うにおよばず、大阪大学の構成員もまた、大阪の国立大学の盟友として深く分かち持つものであります。

両大学の統合への長い道を、これまで温かい眼をもって見守り、支援して下さったすべての方々、新しく生まれ変わった大阪大学のこれからのさらなる飛躍を心待ちにしていいただいているご列席のみなさま方、統合準備に膨大な時間を費やして従事してきたすべての教職員、そして最後になりましたが、何よりもこの統合を、揺るがぬ決意で実現にまで導いてこられた宮原前総長、是永前学長のご努力に、ここに大阪大学を代表いたしまして、あらためて深い敬意と感謝の言葉を申し述べさせていただきます。

ご支援、ほんとうに有り難うございました。



役員室だより

2007.10 Vol.20

本学は、8月26日付けで執行部の顔ぶれが替わり、新室（本部）長のもと新たな第一歩を踏み出したところです。10月1日には大阪外国語大学との統合を果たし、新生・大阪大学として、「地域に生き世界に伸びる」というヴィジョンに沿っていっそう邁進していきたいと希っています。

統合にあたりましては両大学の構成員のみなさまが心をひとつにご尽力いただき、ここにあらためてお礼を申し上げます。そして、この新しい船出を祝すかのように、9月には本学の免疫学研究が「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム」に採択され、続いて、18年度の業務の実績に関する評価結果においてもきわめて高い評価をいただきました。

さて、「役員室だより」は、執行部と本学構成員のみなさまがともに問題意識を共有し、また、意思の疎通をはかる一助となる役目を担っております。ここでは、いま大学がどのような方向に舵を切ろうとしているのか、何に取り組み、何が変わろうとしているのかを、紙面を通してみなさまにお伝えしたいと考えております。

これからも、大学運営にあたり厚いご支援をいただきますようよろしくお願いいたします。

（鷲 田 清 一）

各室の検討状況

総合計画室

鈴木 直先生の後を継いで、8月26日付けで総合計画担当の理事・副学長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。総合計画室で現在担当している業務としては、本学の将来構想、中期目標・中期計画及び年度計画の策定の取りまとめ、概算要求事項の策定、予算配分計画、人員配置計画、施設マネジメント、同窓会及び後援会、男女共同参画の推進等がありますが、これらの諸課題について鈴木先生から引継ぎを受けて、改めて総合計画室ならびに総合計画室長の業務の大学における重要性を再認識いたしました。

このような業務を遂行していくに当たり、私自身は「問題ごとの状況を正確に把握した上で、グローバルな視点から、戦略を持って意思決定していくこと」が重要であると考えています。最初の「問題ごとの状況を正確に把握した上で」というのは、各問題の本質がどこにあり、当事者は何に一番困っておられるのかを正確に理解しておきたいということです。私の経験では、このような点は形式的な文書のみでは伝達されないと考えています。そのためには、当事者とのコミュニケーション、特にフェースツーフェースのコミュニケーションを大事にしていきたいと思ひますし、また鷲田総長が9月の部局長懇談会で提案された各部局と総長・理事との懇談会なども現場の実状を教えていただく良い機会と考えています。2番目に述べた「グローバルな視点から」というのは、「大学全体の立場に立って」ということで、大学全体にとって、また大学の将来にとってどのようなメリットがあるのかを見極め、財政的制約も考慮した上で判断をしていきたいということです。最後の「戦略を持って」というのは、「大阪大学は将来どのような大学を目指していくのか」、「何を伸ばしていくのか」を明確にした上で、それを実現していく施策を着実に進めて行きたいということです。

最後に述べた「戦略」にも関わってきますが、私が現時点で最も重要だと考えているのが、「次期中期目標・中期計画の策定」です。これについては、平成21年度中に策定し文部科学省に提出する必要がありますが、具体的には、評価・広報室が担当される暫定評価のスケジュールにあわせて体制作りを行い、暫定評価の作業にも参画する中で策定に向けた検討をスタートさせていきたいと考えています。今の時点では、不明な点も多々ありますが、4年前に第1期中期目標・中期計画を策定した経験も踏まえうえて、大阪大学の将来像を考えていきたいと思っています。

皆様方のご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

（西 田 正 吾）

学内措置による教育研究組織の整備

平成19年10月1日から、新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備事項として、次の組織の新設が認められました。

- ・世界最高水準の国際研究拠点形成のための組織
免疫学フロンティア研究センター
- ・学内共同教育研究施設
サステナビリティ・デザイン・センター
- ・研究科附属教育研究施設
工学研究科附属サステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター
- ・研究科の協力講座

研究科名	専攻名	協力講座名	協力部局名
医学系研究科	予防環境医学専攻	感染制御医学講座	医学部附属病院感染制御部

文書館設置準備室

- ・名誉教授のインタビュー収録

文書館設置準備室では、名誉教授の方々の大阪大学の歴史にまつわる話について、インタビュー形式でのビデオ収録を行っています。

9月11日及び19日の両日も梅溪 昇名誉教授から、創設期の文学部の実状などについて、貴重なお話をいただきました。

なお、17、18年度には理学部の先生方を中心に収録し、総合学術博物館1階の「世界にはばたく研究者コーナー」で紹介しています。

伏見 康 治 名誉教授
伊藤 順 吉 名誉教授
関 集 三 名誉教授
平尾 泰 男 元助教授
芝 哲 夫 名誉教授
金森 順次郎 名誉教授・元総長



役員室だより

・『文書館設置準備室だより』の刊行

文書館設置準備室では、本年9月に『大阪大学文書館設置準備室だより』第1号を刊行しました。今後、年2回発行していく予定です。『準備室だより』では、文書館設置準備室の活動の概要についてお伝えするとともに、大阪大学の歴史やアーカイブズ学に関するエッセイ等を掲載してまいります。この『準備室だより』は、文書館設置準備室のホームページでご覧いただけますので、ご覧になった感想を準備室までぜひお伝えください。

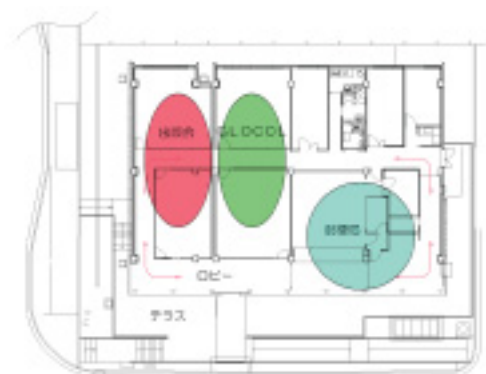
文書館設置準備室 HP アドレス

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/archives/top.html>



旧留学生センターのリニューアル

吹田キャンパスの旧留学生センター建物を有効活用し、今年8月に建物名称「ウエストフロント」としてリニューアルしました。新しい建物は、ロケーションに相応しいシャープで印象深い外観、内外の連続性と回遊性、誰もが使いやすい施設を基本コンセプトに改修しました。「吹田阪大内郵便局」、「グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）」と「大阪大学出版会」が入居しています。



大阪大学出版会



GLOCOL



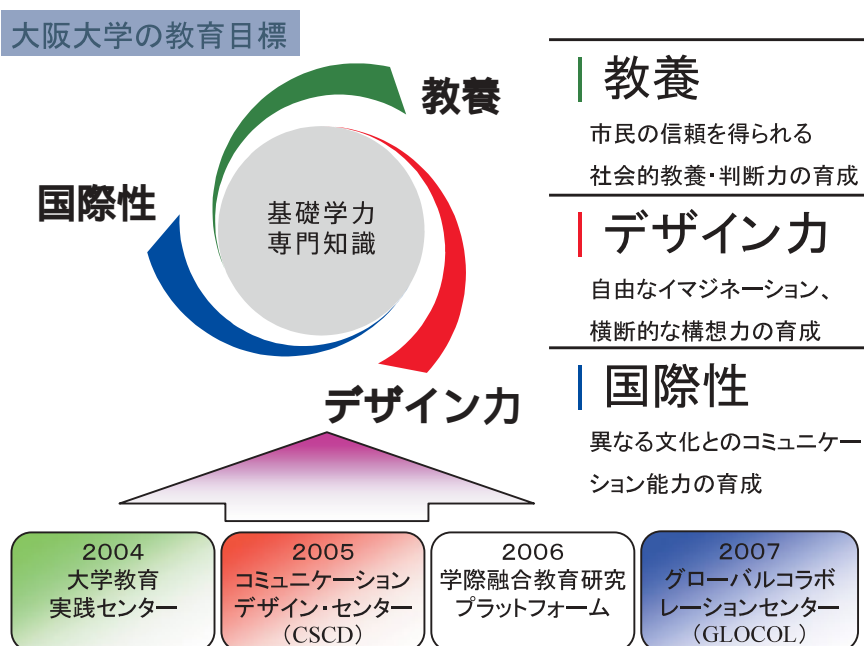
吹田阪大内郵便局

教育・情報室

このたび、8月26日付けで総長に就任した鷲田清一前理事・副学長から教育・情報室長を引き継ぎました。10月1日の大阪外国語大学との統合に伴い、言語文化研究科の三原健一教授（前大阪外国語大学大学院言語社会研究科長）が新しい室員として加わりました。

大阪大学は、「教養・デザイン力・国際性」という3つの教育目標を定め、それぞれの目標を担う3つのセンターを設置しています。新しい体制の教育・情報室も、これらの教育理念を追求し、大阪大学として提供し得る最高の教育を提供するよう努めていきたいと思ひます。特に、統合の理念に基づいて両大学のリソースを有効に生かし、現代の社会が求める人材を育成するための新しい教育を実現していくことが最大の課題であると考えています。

（小 泉 潤 二）



大学説明会（オープンキャンパス）

8月10日から24日までの期間に、平成19年度の大学説明会が各学部で開かれました（大阪外国語大学では7月28日に開催）。新たに外国語学部が加わったこともあり、参加者総数は13,587人にのぼり、昨年より2,704人の増加となりました。

FD（ファカルティ・ディベロップメント）研修

全学の1,018名の助教を対象とする大阪大学FD研修が、9月19日と20日の2日間にわたって行われました。4月に行われたFD研修と合わせて558名の助教が受講し、受講率は約55%でした。今回のFD研修では、大学教育の意味、キャンパスライフの諸問題、メンタルヘルス支援、共通教育賞受賞者による取組事例、教育におけるコミュニケーションの重要性などについて講演が行われました。今後もよりよいFDの開発に努めていきます。

なお、11月8日（木）の午後に吹田コンベンションセンターで、教育・情報室と大学教育実践センターの主催による第3回全学FDセミナーが開催されます。こちらはすべての教員を対象とするものです。教える内容と方法を向上させるためのFDの重要性はますます大きくなっています。全学から多数の教員が積極的にご参加くださるようお願いします。

教育支援プログラムの採択状況

大阪大学は、教育改革のため、競争的な教育支援プログラムの申請に努めてきました。今年度の採択結果は以下のとおりです。

平成19年度競争的教育支援プログラム採択状況

区分	学部・研究科名等	教育プログラム名称	取組担当者名
大学院教育改革	人間科学研究科	人間科学データによる包括的専門教育	川 端 亮
	理学研究科	インテグレート大学院理学教育	金 澤 浩
	工学研究科	複合システムデザインのためのX型人材育成	田 中 敏 嗣
	基礎工学研究科	継続的交換留学制度の構築に基づく人材育成	直 田 健
	医学系研究科	医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養	磯 博 康
	薬学研究科	創薬推進教育プログラム	山 元 弘 弘
現代GP	歯学部	デンタルスキル養成実感シミュレータ学習	上 崎 善 規
がんGP	医学系研究科（保健）	チーム医療を推進するがん専門医療者の育成	松 浦 成 昭
専門職GP	高等司法研究科	紛争の予防能力と修復能力を備えた法曹養成	松 川 正 毅
学生支援	全学部	市民社会におけるリーダーシップ養成支援	大和谷 厚
原子力人材育成プログラム	工学部	原子力教授人材充実プログラム	竹 田 敏 一
	工学部	原子力教育支援プログラム	山 口 彰
	工学部	チャレンジ原子力体感プログラム	竹 田 敏 一
理数応援	理学部	理数オーナープログラム	東 島 清

大学院教育改革：大学院教育改革支援プログラム

専門職GP：専門職大学院等教育推進プログラム

現代GP：現代的教育ニーズ取組支援プログラム

学生支援：新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム

がんGP：がんプロフェッショナル養成プラン

理数応援：理数学生応援プロジェクト

特に、大学院教育改革支援プログラムは、6件の申請が全て採択されました。これは、東北大学と並んで全国1位です。このように、多数のプログラムが採択されたことは各部局と教員各位の努力の成果であり、大阪大学における教育の充実と今後の発展可能性を示すものです。

大学院高度教養教育の推進

大阪大学は、細分化・専門化した科学研究の中に置かれた大学院生全員に対し、科学と社会の関係のあり方、コミュニケーションの重要性、異なる文化に対する感受性などについて、全学共通の高度教養教育を推進しようとしています。このような大学院レベルの共通教育について、大阪大学は全国の最先端を担っています。

この目的のために、「高度教養教育推進ワーキング」が設置されました。コミュニケーションデザイン・センター、大学教育実践センター、グローバルコラボレーションセンター、サイバーメディアセンター、学際融合教育研究プラットフォームから選ばれた8名の委員が、小林傳司コミュニケーションデザイン・センター教授を座長として、大学院レベルの共通教育プログラムについて検討を進めます。

こうした共通プログラムを実施するためには、どの研究科の時間割にも必修科目が入っていない全学共通の時間帯を確保することが必須になります。各研究科のご協力をお願いします。

大学院高度副プログラム

これまでの役員室だよりでもお知らせしてきた、大学院の「高度副プログラム」制度が正式に承認されました。これにより、大阪大学の大学院生は、専攻の教育プログラムに加えて、幅広い分野の素養を身につけるとともに、高度な専門性を獲得する機会が与えられることになります。「副専攻」制度の実現が一步近づいたことになります。

高度副プログラムは、それぞれの教育目標に沿った8単位以上の科目により構成されます。（専攻の修了に必要な単位との重複は認められますが、最低4単位は当該の高度副プログラムの単位として修得する必要があります。）

単独あるいは複数の研究科のほか、研究所やセンターも研究科と連携して、高度副プログラムを教育課程委員会に対して提案することができます。高度副プログラムを修了した学生に対しては、部局長と総長の連名による修了認定証の発行が可能となります。

KOAN による学務情報化

大阪大学の学務の情報化を進めるために、宮原秀夫前総長の指示により平成17年1月に発足した学務情報化特命プロジェクトは、下條真司 前サイバーメディアセンター長をリーダーとして新しい学務情報システム（KOAN）を導入し、シラバス公開、Web履修登録、Web成績登録など所期の目的を達成しましたので、この9月に解散しました。今後はKOANの安定的な運用を目指して、情報基盤委員会のもとに置かれるKOAN運用ワーキングが業務を引き継ぐ計画です。

研究推進室

鷲田清一新総長のもとで研究推進担当の理事・副学長を拝命し、大阪大学の卓越した研究のアクティビティを維持し、さらに発展させることの重責を痛感しております。その中で、最も重要なことは、本学の構成員が萌芽的な研究から大規模研究プロジェクトに至るさまざまな研究活動を自由闊達に展開できるように支援を行い、その結果として本学において日々研究活動に邁進することに誇りを抱ける体制を築くことにあると考えています。また、競争的資金を獲得すればするほど、該当部局の運営上、事務上の負担が増すような構造も早急に改善することが求められています。以下、三つの重要課題を記します。

(西 尾 章治郎)

世界的な研究拠点の形成

本学の構成員が誇りをもって研究を推進するには、本学が研究活動に関して国際的に確たる位置を占め、情報発信をしつつ、学術・産業分野への多大な貢献、ひいては人類の幸福に寄与しているという自負が重要です。文部科学省の本年度開始事業に限っても、本学はそのような拠点形成を着実にやってきています。例えば、マスコミなどでも大きく取り上げられたように、本学は「グローバルCOEプログラム」において、「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」(人文科学分野)をはじめ全国最多の7件が採択され、さらに、「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム」では、全国有数大学から申請のあった33件の中から5件のみ採択された中に、本学の「免疫学フロンティア研究センター」構想が含まれています。今後もこのような拠点形成プログラムについては、学内からのボトムアップな申請をベースに、その必要性、卓越性、さらには新たな学術分野の創出や社会的意義などを踏まえた上で積極的に申請し、さらなる拡大を図る所存です。

産学官連携・知的財産管理関係

大阪大学では、特許をはじめとする知的財産管理に関する制度・体制を整備しつつ、研究契約の柔軟な対応や大阪大学独自の産学官連携制度である共同研究講座の導入、組織的な産学連携を推進してきました。このような活動の効果もあり、特許や研究成果有体物移転による収入は、法人化前の100万円以下から4000万円以上に、共同研究経費も約12億円から約23億円に増加するなど、大きな成果をあげています。本年度から、活用をさらに重視した知的財産の出願・維持を目指しておりますが、これらの活動を支えてきた政府の「大学知的財産本部整備事業」が本年度をもって終了することから、産学官連携・知的財産管理に関する体制の再構築、支援組織の強化等が緊急課題となっております。

「イノベーション」の創出・促進が、政府の重要な施策として位置付けられるなか、本学が世界に類を見ない新たな成果を通じて、社会に大きな発展をもたらすためにも、本学の活動に中長期的な産学官連携の指針をしっかりと位置付け、皆様とともに新たな産学連携・知的財産活動を推進する所存です。

USRを意識した研究活動の高揚

最近、企業の社会的責任、つまり、CSR (Corporate Social Responsibility) が重要視されています。特に、法人化後の大学においては、同様の責務、つまり、USR (University Social Responsibility) が求められることは必至です。特に、研究資金の大部分が本を正せば国民の大切な税金から支援されていることを考えると、文系、理系を問わず、大学における研究活動の成果を分かり易く市民に説明し、それらの活動が市民生活にどのように還元されていくのか、倫理的あるいは安全・安心の観点から問題ないのか、さらには直接的な還元は言い難くてもいかに「夢」を与え、心を豊かにするものなのかを積極的に説明していく必要があります。現在、鷲田新総長のもとで「社学連携」が強く推進されつつありますが、その考え方とも関連しています。今後、産学連携と社学連携の関係を明確にしながら、USRを視野に入れたより大きな概念のもとで、産学連携を展開して行く所存です。

評価・広報室

このたび、馬場明道前室長の後を受け、評価・広報室長に就任しました。評価は、教育・研究を行うときと同じように、目標を立て、点検を行い、さらに発展させる、これを組織として行うことは、大学が継続的な質の向上と社会への説明責任を果たすことに役立っていると思います。これまでのやり方を継承しながら、教職員の負担をできるだけ軽減できるよう工夫し、有効な評価を行うよう努めます。広報については、大学や執行部の考え方が、教職員に速やかに伝わるのが大切ですので、この点も含め広報の在り方を検討します。

(高 杉 英 一)

18年度に係る業務の実績に関する評価結果の公表

各国立大学法人の平成18年度の年度評価結果が、国立大学法人評価委員会から公表されました。

本学の評価結果については、本学が教育研究の質の向上と業務運営の改善に積極的に取り組んだ種々の実績が十分に評価され、特に「業務運営の改善・効率化」の進捗状況は、「中期目標・中期計画の達成に向けて特筆すべき進捗状況にある」と高く評価されました。また、「財務内容の改善」、「自己点検・評価及び情報提供」、「その他の業務運営に関する重要事項」の進捗状況も、「中期目標・中期計画の達成に向けて順調に進んでいる」との評価を受けました。全体的に、中期目標・中期計画の達成に向け順調に進んでいると国立大学法人評価委員会から評価されたことになります。項目別評価の評定は、昨年と同じ「5・4・4・4」です。

各部局におかれましては、業務実績報告の作成にご協力いただき大変ありがとうございました。

同評価結果については、ホームページに掲載していますので、ご覧ください。

[http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/pdf/hyouka\(h18\).pdf](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/pdf/hyouka(h18).pdf)

【評価結果抜粋】

1 全体評価

大阪大学は、「地域に生き世界に伸びる」という理念の実現に向けての取組を積み重ね、成果を上げている。平成18年度は、大阪外国語大学との統合の合意締結を受け、両大学間で設置した統合推進協議会において、教育研究や組織運営の方針、具体策の協議が着実に進められていることは評価できる。

この他、業務運営について、教員については、部局における個人評価に基づき、人件費の一部を業績手当に加算すること及び同手当の成績率を通知する制度を継続している。また、年俸制の教員の各基本俸額を評価結果に基づき調整を行う制度を活用し、平成18年度は3部局14名に適用するとともに、教育・研究功績賞制度により、50名に一時金を授与するなど、インセンティブの付与を活用している。事務系職員についても勤務評価結果の給与等への反映を含む新勤務評価制度を全学的に導入している。

財務内容については、余裕資金の長期、短期資金運用を効率的に行い、財務収入を獲得している。また、地方公共団体、同窓会等の学外機関との連携を深めるとともに、研究活動を発信したことにより、外部資金比率が14.8%（対前年度比1.6%増）となっている。

自己点検・評価、情報提供については、各部局から報告のあった平成17年度達成状況評価シートを評価・広報室長（理事）が検証し、達成状況評価書としてまとめ各部局へ送付している。さらに当該資料は平成20年度概算要求等総長ヒアリングの参考資料として活用するなど、執行部と各部局の評価に対する意識とコンセンサスの向上を図っており、組織評価の重層的、効果的活用のケースとして注目される。

施設設備の整備・活用等については、キャンパスマスタープランを策定し、長期的かつ総合的な推進を図るためキャンパスデザイン室を設置し、学内外からキャンパス計画に関する専門知識を有する専門家を配置するなど、積極的な取組を行っている。

教育研究の質の向上については、大阪外国語大学との統合後に発足する大学院新専攻・学部新学科の教育課程・カリキュラムの設計、新たな共通教育の枠組、外国語や日本文化を研究する新センターの構築を進めていることは注目される。

2 項目別評価

(1) 業務運営の改善及び効率化	5
(2) 財務内容の改善	4
(3) 自己点検・評価及び情報提供	4
(4) その他業務運営に関する重要事項	4

- 5：特筆すべき進捗状況にある
- 4：順調に進んでいる
- 3：おおむね順調に進んでいる
- 2：やや遅れている
- 1：重大な改善事項がある

達成状況評価の実施

9月～11月にかけて、部局に対する達成状況評価を実施します。達成状況評価は、4月に提出された部局達成状況評価シートを用いて、評価・広報室において達成状況評価書を作成することにより行います。

コメントは、教育、研究、その他の下に設けた小項目ごとに、平成18年度実績で特に努力が見られる点や根拠データの整備状況、平成18年度実績と平成19年度計画との整合性、中期計画の達成に向けての観点から行います。

11月下旬には、評価結果を送付する予定ですので、各部局におかれましては、平成19年度の計画の推進及び平成20年度計画の策定に活用いただくようお願いいたします。

国立大学法人の中期目標期間評価（暫定評価）への対応

暫定評価のうち、現況分析単位となる関係各部局におかれましては、平成19年12月末提出に向けて「現況調査表」の作成作業を進めていただき、誠にありがとうございます。

なお、各部局からの質問等を基に、『暫定評価「現況調査」に関するよくあるご質問 Q & A』としてとりまとめ、大阪大学ポータル・学内専用に掲載しましたので、ご活用ください。なお、内容については随時更新していきます。

https://www-info.osaka-u.ac.jp/gakunai/g_sh/hyoka/pdf/Q&Av1.0.pdf

また、各室等あてにも、暫定評価関係の作業をお願いしておりますが、ご協力方よろしくお願い申し上げます。

10月からホームページをリニューアル



10月1日の新生「大阪大学」のスタートを機に、ホームページをリニューアルしました。

トップページを中心に、情報へのアクセスを簡便、スムーズにするなど、より一層の向上を図りました。

また、トピックス、イベント情報欄を増やし、大阪大学の動きをお知らせする機能を強化しました。

同時に、英語版のトップページもリニューアルしました。



阪大ニューズレター No.37 の発行

今回は、8月26日に総長に就任された鷲田総長へのインタビュー「目指す阪大スタイルとは」を取り上げています。

財務・会計室

このたび、財務・会計室及び病院担当の理事・副学長を拝命いたしました。後者については、新執行部体制になり、新たに設けられた担当であり、別の機会に抱負を述べさせていただくことにして、ここでは財務・会計室の運営について抱負を述べさせていただきます。

当室の役割は、大学の最高決定機関である役員会において迅速な意思決定ができるように、予算の配分及び執行、財務に関する中期目標・中期計画及び年度計画の策定、自己収入・運営費交付金・外部資金等の資金管理及び運用計画の策定、借入金借入及び返済、資産管理、財務諸表に関する事項等についての企画、立案とそれらに必要な資料収集を行うこととなっており、法人化以降、その役割を順調に果たしてきているところであります。

ご存じのとおり国立大学法人の財政基盤の多くは国からの運営費交付金等で支えられていますが、毎年、効率化係数や経営改善係数がかけられることにより、その交付額は年々減少しております。本学では、毎年約9億円程度の減額が課せられており、この中期計画期間中の財政状況は益々厳しくなって行くことは明白であります。しかし、財政状況の悪化に伴い、大学の使命である教育・研究に弊害が生じるようなことは言語道断、決して許されるものではなく、抜本的な対応策が求められているところであります。そこで、次の2点について特に強調したいと考えます。

まず最初に、長期的視野に基づく財政戦略を立てることで、長期的スパンで競争的資金、自己収入及び寄付金等の獲得を含め、予算の策定を行うことであります。これまでの当室の役割は、財務・会計という性質上、また、大きく変動した会計制度への円滑な移行を図るため、比較的保守的で、しかも目先の業務に追われる傾向が強かったのではないかと思います。今の対応を確実なものにし、将来に継いでいくためには、今中期計画全体で考えることは言うに及ばず、次期中期目標・中期計画、さらには10年、20年のスパンで大阪大学の将来像を視野に入れた施策が必要となります。そのためには、総合計画室をはじめ他の室と緊密な連携を図り、大学全体のグランドデザインを描くことが重要と考えます。

もう一つは、財政戦略の立案は常に全学的視野に立って行われなければならないということでもあります。20世紀は分析科学の時代とも言われ、専門性を深めるために各分野の細分化が非常に進みましたが、今や、その専門性を他部門とどの様に統合して行くかが問われるようになってまいりました。その観点より、各部局の皆さんと合意形成を図り、学内全体でバランスのとれた対策を講じるための戦略的施策を優先したいと考えます。そのためには、多くの大学構成員が情報を共有できるよう透明性のある環境を整える必要があります。それに向けて努力する所存であります。

以上のような考えにより、「オープン」「フェア」「ベスト」をモットーに当室を運営したいと考えておりますので、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。（門 田 守 人）

平成18事業年度財務諸表の承認

平成18事業年度に係る財務諸表並びに決算報告書等については、6月に文部科学大臣に提出していましたが、このたび、9月11日付けにて承認されました。

承認された財務諸表等については、大阪大学のホームページに掲載しています。

[http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/zaimu\(h18\).html](http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/joho/zaimu(h18).html)

平成19年度教育研究等重点推進経費の執行計画

「教育研究等重点推進経費」の第3次執行計画案が、役員会で承認されました。今回は、大阪外国語大学との統合に伴う諸整備についての執行計画となっています。

採択事業の詳細は以下のとおりです。

部局名等	事 項 名
教育研究専門部会 (大学教育実践センター)	専攻語実習のための資料室等(改修)
教育研究専門部会 (大学教育実践センター)	駐車場拡充(改修)
事務局各部	統合に伴う事務組織改組経費(吹田地区)
執行計画額	合計 23,290千円

人事労務室

大阪外国語大学との統合にかかる就業規則等の改正及び制定

平成19年10月1日に大阪外国語大学と統合し、新たな大阪大学となりました。これに伴い、人事制度については、両学が合意した次の基本理念に添って、就業規則等を改正及び制定しました。最新の就業規則等については、大阪大学のホームページ等をご覧ください。

「大阪大学及び大阪外国語大学の統合後の人事制度にかかる基本理念」

大阪大学及び大阪外国語大学の統合後の人事制度については、原則、大阪大学の人事制度に合わせることを基本理念とする。ただし、調整が必要となる事項は、経過措置を検討する。

【平成19年10月1日改正】

サステナビリティ・デザイン・センター等の地域手当

兵庫県尼崎市に学内共同教育研究施設として設置されたサステナビリティ・デザイン・センター等の地域手当について、種々検討の結果、吹田及び豊中キャンパスに適用している地域手当と同額とすることとしました。

【平成19年10月1日改正】

若手教育研究者を対象とした雇用継続可能地位への移行制度（テニユア・トラック制）

本学では、部局等が、有望な若手教育研究者の確保及び育成を図るため、当該部局等で採用した若手教育研究者について、雇用継続可能地位への移行制度を試行的に実施する場合における指針を新たに決めました。

（学内専用ホームページに掲載）

https://www-info.osaka-u.ac.jp/gakunai/g_sj/affairs/kitei/1031.pdf

【平成19年9月25日制定】

世界トップレベル国際研究拠点形成促進のために設置された特別の部局 「大阪大学免疫学フロンティア研究センター」に適用する人事関連の特別措置

微生物病研究所の審良静男教授を拠点責任者とする世界トップレベル研究拠点プログラムに採択されたことに伴い、大阪大学免疫学フロンティア研究センターを設置しました。

このセンターは、我が国が将来の発展の原動力であるイノベーションを連続的に起こすべく、その出発点である大学等の基礎研究機能を格段に高め、国際競争力を強化することにより、世界トップレベルの研究拠点を従来の発想にとらわれることなく構築して、世界の頭脳を集い、優れた研究成果を生み出し、さらに人材を育む「場」を「目に見える拠点」として形成することを目的としております。

このような特別の部局の円滑な運営のため、当該部局に限定して適用される人事関連の特別措置を定めました。

（学内専用ホームページに掲載）

https://www-info.osaka-u.ac.jp/gakunai/g_sj/affairs/kitei/1041.pdf

【平成19年9月25日制定】

国際交流推進本部

橋本日出男前本部長の後任として、8月26日に国際交流推進本部長に就任いたしました。世界銀行等での豊富な海外活動歴を持っておられた前本部長とは異なり、どちらかといえば、国際交流の推進に関しては新参者の私ですが、法人化直後から留学生センター長として、また国際交流担当の総長補佐として、橋本前理事のご指導の下で鋭意この問題に取り組んで参りました。微力ではありますが、本学が真に「世界に開かれた魅力ある大学」となるために、今後も積極的に活動を展開して行きたいと考えております。皆様方の強力なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(辻 毅一郎)

学生・研究者交流の推進

本学ではこれまでもそれぞれの部局における研究成果をベースに、国際交流が活発に行なわれてきています。しかしながら、特にここ数年、世界の大学はこぞって国際化を進めており、特に学生の流動性（Student Mobility）を高める動きが活発です。例えば、ヨーロッパにおける「ボローニャプロセス」は、欧州各国の事情でそれぞれ異なる高等教育システムを標準化しようとする動きですが、すでにEUの枠を超え、40数カ国がそれに参加しています。そうした中で、エラスムス計画と呼ばれるプロジェクトでは、毎年14万人の学生がEU域内の2200の大学・機関に留学しています。さらにEU域内だけではなく、域外の大学を含んだ異なる国の複数の大学が、コンソーシアムを組んで特定の分野の教育プログラムを提供する動きもあり、学生の流動はすでに欧州を越え、世界に拡大しつつあります。一方、アメリカでは、ハーバード大学やイエール大学が全ての学部生を海外に派遣することを目指し、また、政府において、毎年100万人の学生を海外に派遣しようとする動きがあります。中国も最近、毎年5000人規模で海外の大学院へ留学させるための奨学金制度を新たに設けました。

アジア諸国が急激な発展を見せる今日、我が国もその存在を確固たるものにするためには、国際化が必要であることは論を待ちません。高等教育の一環として、学生の国際性を高めるために、学生の海外派遣は極めて重要であると考えます。また、相互交流の意味で、各国からの留学生受け入れを一層進めることも重要です。こうした観点から大阪大学を眺めると、残念ながら学生の交流はまだまだ数的に低いレベルに留まっており、大学としてこれを強力に推進していく必要があると考えています。もちろん、ここで指摘しておきたいのは、学生交流のベースとなるものは研究交流であるということです。本学の研究者が世界的に認められる研究を行ない、外国の研究者と知り合い、そのベースを作ることが基本的に重要です。幸い、本学には既にそのようなベースが数多く存在しています。推進本部はそのようなところに協力をお願いするとともに、本部としてもできる限りの方途・施策を講じて、研究者・学生交流の一層の推進を図りたいと考えています。

ワンストップ・サービス・オフィスの業務試行開始

研究者・学生交流の推進に寄与する新しい試みとして、この10月から学生交流推進課内に「Support Office for International Students and Scholars（サポート・オフィス）」が設置されることになりました。現段階ではまだ試行ということで、本格的稼働は来年度を目指しています。ここでは、受け入れに伴う、宿舍の斡旋、ビザの申請書類作成、その他各種情報提供などの業務を一元的・効率的に処理して、外国人研究者・留学生へのサポートを行なうとともに、受け入れ教職員の負担を軽減しようとするものです。このようなサポート体制は、「ワンストップ・サービス・オフィス」という呼び名でこれまでも長らく検討してきたものですが、このたび「世界トップレベル研究拠点プログラム」へ「免疫学フロンティア研究センター」の申請が行なわれたのをきっかけに急激にその必要性が認識され、その試行が認められました。幸い、同申請は採択されましたので、国際性豊かな新しい研究センターのニーズに対応して、このオフィスの機能を順次高めて行けば、大阪大学の外国人研究者・留学生受け入れの体制は大幅に改善され、我が国ではまだ珍しく、外国有名大学と肩を並べることができると期待しています。

世界に開かれた魅力ある大阪大学を目指して

世界各地から魅力ある大学として認められるには、まず何と言っても世界水準の教育・研究が行なわれているという状況を作り出さなければなりません。そして、それが世界各地の研究者、学生の関心と呼び、本学を訪れ、また本学に滞在する。それが刺激になり、なお一層レベルの高い教育・研究をもたらし、持続的発展可能な社会の構築に寄与する。このポジティブなループをいかに作り出すかが長期的課題です。推進本部の活動として、学生・研究者交流の推進ということを前述しましたが、そのほかにも研究推進室や教育・情報室とも連携しつつ、情報発信力の強化（国際広報）、国際学術研究ネットワークの積極的利用と新しいネットワークの形成、キャンパスならびに地域の国際化にも取り組み、このループを実現していきたいと考えています。

海外教育研究拠点と国際企画室の活用

本学は、我が国の他大学に先駆けて世界3ヶ国（アメリカ：サンフランシスコ、オランダ：グローニンゲン、タイ：バンコク）に海外教育研究センターを、大学本部が管轄する本格的なセンターとして設置したことは周知のとおりです。阪大NOW6月号に、各センター長の抱負が掲載されています。これらの海外教育研究センターは、国際的人材の育成に寄与する教育プログラムの開発と実施、セミナー・フォーラムの開催や各地の学術交流活動への参画などによる大阪大学のプレゼンスの向上、新たな研究ネットワークの形成支援などを行なうことを目的としています。海外教育研究センターは、このたび設置することになったSupport Office for International Students and Scholarsとともに、国際化推進のための大学としてのインフラの一つです。当然のことながら、構成員の皆様はこれらのセンターをご利用いただけます。今後、教育・研究の様々なステージで、ぜひこれらの海外センターの存在も頭に入れて構想されるなど、ご活用いただきたいと願っています。

もう一つ、本学は国際戦略本部強化事業へ応募し採択された結果、国際企画室を設置しました。この企画室は国際交流推進本部の下に置かれ、調査・企画を担当し、これまで既に多くの調査研究実績を残しています。国際交流推進本部のシンクタンクとして機能しているオフィスです。国際交流推進に関する忌憚のないご提案やご意見をお寄せくださるなど、このオフィスもご活用ください。

「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム」に採択

免疫学フロンティア研究センター拠点長 審 良 静 男

このたび、世界トップレベル研究拠点プログラム（国際研究拠点形成促進事業費補助金）に大阪大学から申請した「生体イメージング技術を用いた動的な免疫系の解析」が採択され、その拠点組織として大阪大学免疫学フロンティア研究センターが10月1日に設置されました。

世界トップレベル研究拠点プログラム採択拠点一覧

	ホスト機関名	拠点構想の名称
1	大阪大学	免疫学フロンティア研究センター
2	東北大学	国際高等原子分子材料研究拠点
3	東京大学	数物連携宇宙研究機構
4	京都大学	物質・細胞統合システム拠点
5	(独)物質・材料研究機構	国際ナノアーキテクトニクス研究拠点

■ 世界トップレベル研究拠点プログラムの概要

我が国の科学技術水準を向上させ、将来の発展の原動力であるイノベーションを連続的に起こしていくためには、その出発点である我が国の基礎研究機能を格段に高め、国際競争力を強化していく必要があります。そのためには、世界トップレベルの研究拠点を、従来の発想にとらわれることなく構築し、世界の頭脳が集い、優れた研究成果を生み出すとともに、優秀な人材を育む「場」を我が国に作っていく必要があります。

このような観点から文部科学省では、高いレベルの研究者を中核とした世界トップレベルの研究拠点形成を目指す構想に対し集中的な支援を行い、既存の制度にとらわれない優れた研究環境を実現するためのシステム改革の導入等の自主的な取り組みを促すことにより、研究水準の一層の向上を図るとともに第一線の研究者が、是非そこで研究したいと世界から多数集まってくるような、優れた研究環境と極めて高い研究水準を誇る世界的に「目に見える拠点」の形成を目指すことを目的とするプログラムを今年度新たに創設したものです。

このプログラムには、全国の大学、共同利用機関等22機関から33件の申請があり、外国人有識者を含むプログラム委員会での厳しい審査を経て、本学を含め5件のみが採択された特筆に値するプログラムです。このプログラムの実施期間は10年とし、助成開始5年後に評価が行われ、計画の変更、中止等の見直しが行われるとともに、最終年度の評価で特に優れた成果を上げている拠点にはさらに5年の延長が認められます。

また、このプログラムによる拠点の共通語は英語とされており、構成員の30パーセントを占めることになる外国人研究者に対する配慮がなされています。

■ プログラムの特色

このプログラムにはいろいろな特色があり、補助金の直接経費の使途についてもほとんど使用制限がなく、一般の補助金にはない柔軟な運用が可能となっています。

また、ホスト機関には拠点の運営についても既存の制度にとらわれない新たな制度設計が求められており、本学においても既に人事制度等で特例規程等が設けられるなど柔軟な運営が可能となる措置がとられています。

なお、このプログラムの申請に際しては、ホスト機関として総長のコミットメントが求められており、拠点に対しいろいろな点で機関をあげて支援することを約しています。

■ 研究組織

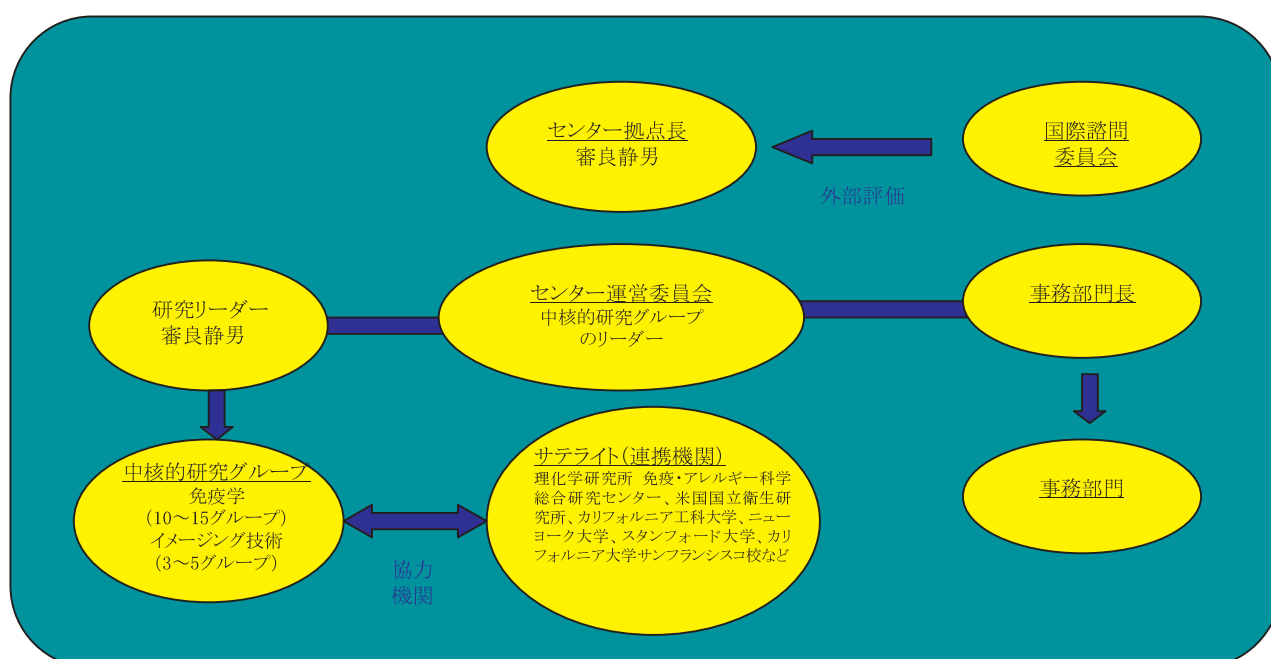
本学における拠点の組織となる免疫学フロンティア研究センターは、新たな形態の組織として位置づけられ、拠点長には拠点構想責任者である微生物病研究所の審良静男教授が就任しました。拠点の構成員としては、母体となった微生物病研究所から発足と同時に学内派遣として3名の教授が就任し、また、近々に医学系研究科や生命科学研究科などの関連部局から兼任教員として参画が予定されています。さらに、漸次他機関や海外から著名な研究者が特任教員等として参画することが予定されており最終的には専任・兼任併せて200名を擁する組織として充実・発展が図られることになっています。

拠点の研究施設は吹田キャンパスに新たに建設される建物（融合型生命科学総合研究棟）内に相当のスペースが割り当てられる予定となっている外、動物実験施設の建設も予定されています。

事務的支援体制としては、拠点専属の事務組織が置かれ、定員内職員が配置されるとともに、このプログラムの共通語である英語に対応するため、語学堪能な特任事務職員等を配置して研究者には研究に専念できる支援体制を整えることとしています。



拠点メンバーの研究場所となる融合型生命科学総合研究棟（平成21年3月完成予定）

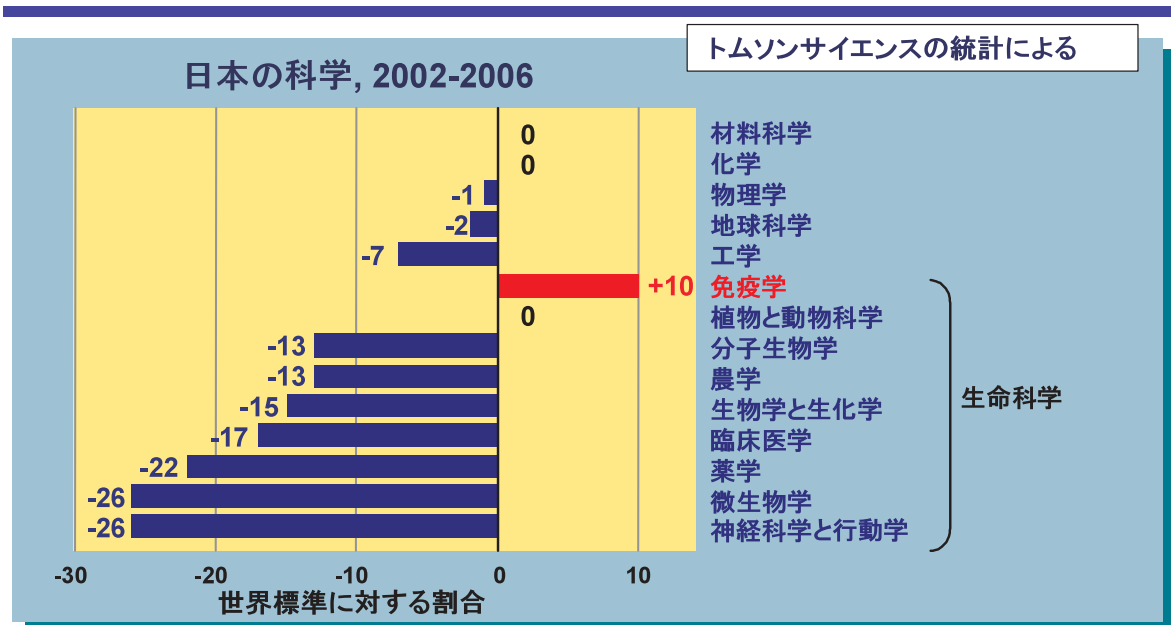


世界トップレベル研究拠点プログラムのスキーム

■ 研究内容

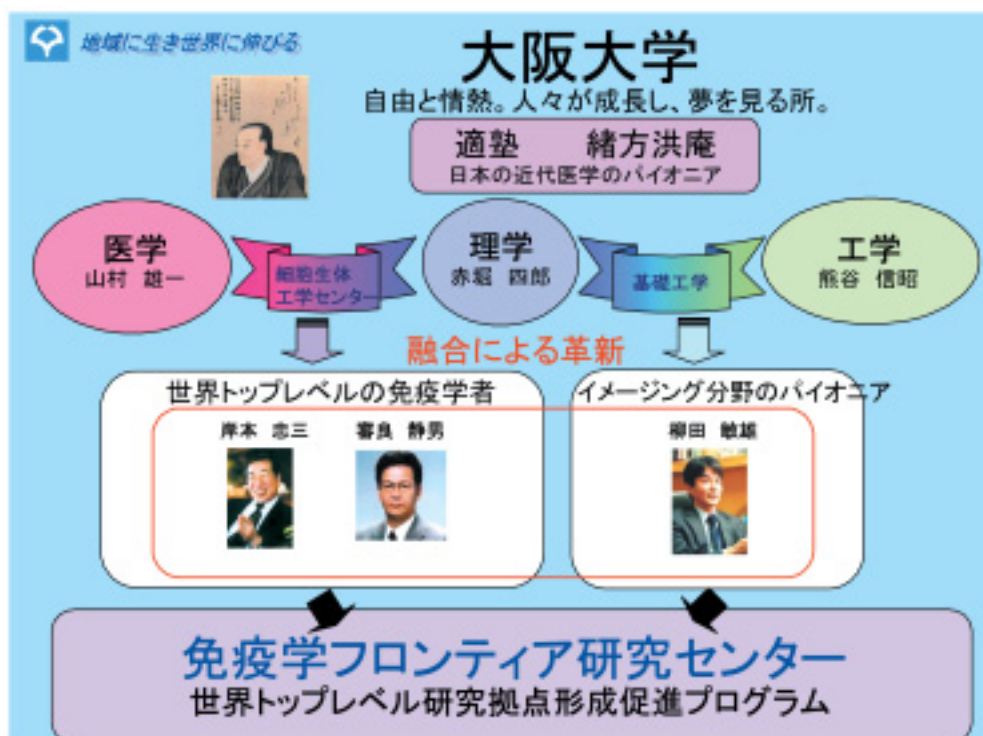
免疫学は日本がリードしてきた領域の一つで、その多くを山村雄一元総長や岸本忠三元総長をはじめとする大阪大学の研究者が成し遂げてきました。現在でも、日本の生命科学の中で免疫学のみが世界標準を大きく超えるレベルにあります。このように本学では免疫学研究においては突出した成果を上げ、世界をリードしてきたところです。

世界の標準レベルを超える免疫学



$$\text{世界標準に対する割合} = \left(\frac{\text{日本の引用回数}}{\text{日本の論文数}} - \frac{\text{世界の引用回数}}{\text{世界の論文数}} \right) / \frac{\text{世界の引用回数}}{\text{世界の論文数}} \times 100$$

大阪大学の源流から拠点の形成へ

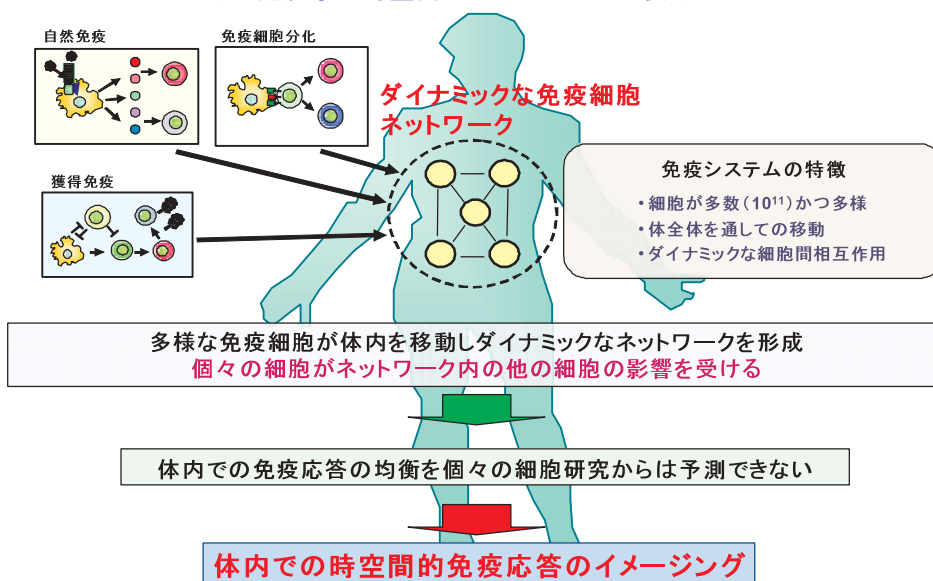


しかしながら、免疫システムを解明し、感染症の制圧、免疫病の克服など人類の夢を達成するには、まだいくつかのハードルが残されています。

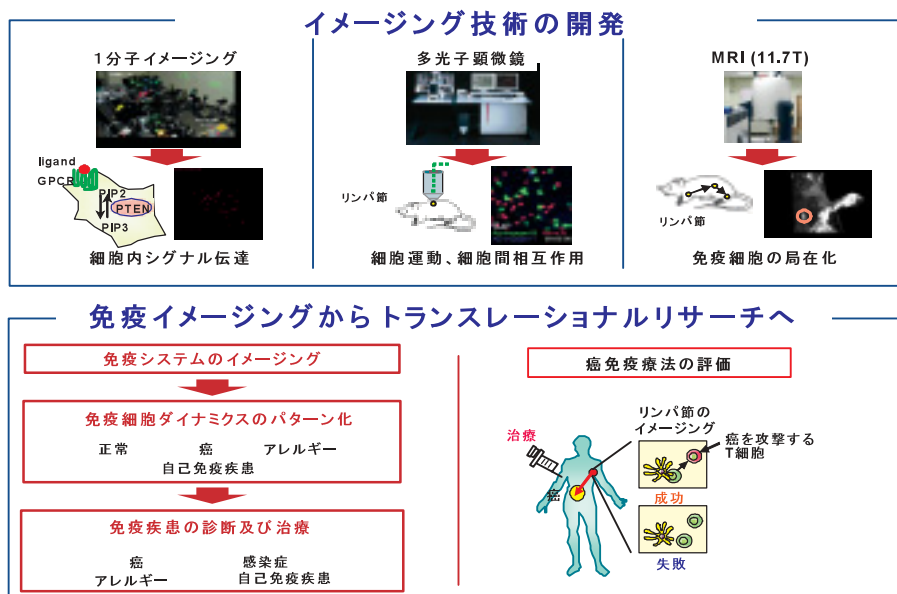
これまでの免疫学研究は、単離された免疫細胞の限定した条件における免疫応答の理解の段階であります。この拠点においては、本学の一方向の特出した分野（柳田敏雄教授グループ（生命機能研究科））である生体イメージング技術との融合を通じて、体の外から体内の免疫細胞の動きや細胞間の情報交換を直接目で見ることのできるイメージング（画像化）技術を開発し、体内での動的な免疫システムの全貌を明らかにすることを目指します。それとともに、免疫疾患（感染症、自己免疫疾患、アレルギーなど）や癌の診断・治療への応用を目指します。

免疫学研究の新しいアプローチ

なぜ免疫学に時空間的アプローチが重要なのか？



イメージング技術との融合



この拠点を構成する主なメンバーは、本学からは拠点長の審良静男教授、岸本忠三元総長をはじめ菊谷 仁、木下タロウ（共に微生物病研究所教授）柳田敏雄、平野俊夫（共に生命機能研究科教授）、宮坂昌之（医学系研究科教授）らが、また、学外からも著名な免疫学研究者が多数参画する予定となっています。

フォトニクス先端融合研究センターを協働研究企業5社と設立

本学では、平成19年度科学技術振興調整費・先端融合領域イノベーション創出拠点の形成プログラムに「フォトニクス先端融合研究拠点」を提案し、採択されました。本プログラムは、株式会社島津製作所、シャープ株式会社、日東電工株式会社、株式会社三菱化学科学技術研究センター、IDEC株式会社との共同提案で、本学からは工学研究科、基礎工学研究科、生命機能研究科、レーザエネルギー学研究センター等より、20以上の研究室が参加します。

この採択を受け、本学の有する最先端フォトニクス技術に関する研究を、新たな産学連携方式である相互浸透型協働研究システムにより推進してゆくことを目指し、拠点形成を通じてエレクトロニクス技術の究極化を図るとともに、光（フォトン）が有する人と環境への優しさを最先端フォトニクス技術として社会に浸透させる日本発の産業イノベーションを創成するため、拠点の中核となるフォトニクス先端融合研究センターを7月2日（月）に設立しました。7月3日（火）には本センターの発足式が医学部銀杏会館で挙行され、豊田政男工学研究科長からの挨拶の後、河田 聡センター長らがセンターにかける情熱をあつく語り、また、各参加研究室によるポスター発表では、協働研究企業からの参加者との活発な意見交換の中で相互理解を深めるなど、大変有意義なものとなりました。

さらに、8月10日（金）には、本学ならびに協働研究企業



協働研究企業との共同記者会見

との共同記者会見を実施し、広く世界に向け、この取り組みの意義やセンター設立の経緯、今後の計画などについての情報発信を行いました。

今後、センターでは、各参加機関が相互に研究室を設けることにより物理的に空間を融合し、相互の研究者が一体となって、基礎研究から応用まで一貫した技術開発を行うことができる相互浸透型産学協働システムの構築を目指すこととしています。

（工学研究科・工学部）

平成19年度『海の日』船舶試験水槽公開

工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学部門では、7月16日（月・祝）の『海の日』に船舶試験水槽をはじめ関連施設の公開を行いました。この催しは『海の日』が制定された平成8年から、近隣小学校の高学年児童を対象として毎年行っています。

当日は時折強い雨の降る生憎の天候にもかかわらず、児童・保護者を合わせて180名の参加を得て盛大に開催されました。

全長100mの船舶海洋試験水槽におけるパラメトリック横揺れ実験の見学、風洞実験棟における模型飛行機の浮揚実験や風圧体験、本部門で開発されたイカロボットやかものはしロボットの実演展示、TVでも紹介されたアメーバ水槽のビデオ上映のほか、教室における浮力についての模擬講義や浮沈子の実験など盛りだくさんの内容で、大好評のうち成功裡に終えることができました。

毎年のことではありますが、本学へ来たのは初めてという参加者がほとんどで、本催しが地域貢献の一助となっていることを実感しました。

最後に、本催しに対して補助をいただいた、庚子造船会、



船舶海洋試験水槽での実験

日本船舶海洋工学会関西支部ならびに、ご協力いただいた皆様に感謝致します。

（工学研究科・工学部）

医学部保健学科医療経済・経営学(アストラゼネカ)寄附講座開設記念シンポジウム開催

7月21日(土)、大阪商工会議所国際会議ホールにおいて、医学部保健学科医療経済・経営学(アストラゼネカ)寄附講座主催シンポジウム「どうする、これからの医療 - 目指すべき2025年の医療 -」が、一般および医療関係者等約220名の参加を得て開催されました。

このシンポジウムは、最先端の医学および工学技術・薬



学・歯学・経済・経営を融合させ、新たな医療経済経営システムを開発し、医療現場とのフィードバックを繰り返し、普遍的にかつ広く社会に貢献することを目的とする寄附講座の開設を記念して開催されたものです。

当日は、遠山正彌医学系研究科長の挨拶の後、薄井康紀厚生労働省政策統括官による「少子高齢化時代の医療の展望」と題した基調講演があり、その後のパネルディスカッションでは、遠山研究科長のコーディネートのもと、薄井政策統括官、大熊由紀子国際医療福祉大学大学院教授、酒井英雄大阪府医師会副会長、加藤益弘アストラゼネカ株式会社代表取締役社長をパネリストに迎え、テーマ「どうする、これからの医療 - 目指すべき2025年の医療 -」に沿って、医療費の通説、予防医療の概念の明確化と導入、IT技術の活用などについてディスカッションが行われました。シンポジウム終了後には、参加者による活発な質疑があり、医療経済・経営学に対する関心の深さがうかがえました。

なお、同寄附講座では、後期に中之島センターで全9回の公開講座を予定しています。

(医学系研究科・医学部)

サステナビリティ・サイエンス研究機構がワークショップ開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)は、7月23日(月)、吹田キャンパスで、「持続可能な社会に向けたEU都市環境政策 - 2000年以降の展開を中心に」と題し、『サステナブルシティ - EUの地域・環境戦略』(学芸出版社)の著者である千葉大学大学院工学研究科の岡部明子准教授を講演者に招いてワークショップを開催しました。

このワークショップは、EUの各都市における都市政策と環境共生政策について学ぶ中で、持続可能な社会の実現を目標とした、技術開発や社会システムデザインのための政策の在り方について理解を深めることを目的としたものです。

講演の中で岡部准教授は、EUの政策とは一線を画し、数カ国の自治体が連携するネットワーク型のCO₂削減政策として、コペンハーゲン、ミュンヘン、バルセロナ、ハイデルベルク、グラーツ、下オーストリア州などの事例について発表されました。また、大都市では、CO₂削減策が再生可能エネルギーの割合を高めることに特化される傾向にあるという問題についても事例を列举され、科学的・分析的な手法によるアプローチの限界を指摘されました。また、これらの議論を踏まえ、日本における政策の参考とできないか検討を行い、EUの各都市は規模が小さく成長度も低



いため、直接的な関連性を見いだすことはできないが、その方法論については応用可能であるとの結論を披露されました。

今回の講演では、近年のEU諸国における都市環境政策が、気候変動の回避を目指す段階から適応を指向する段階へと移行する傾向にあることが明らかにされ、都市環境における局面の変化と対応の因果関係や、各都市における諸条件の違いを確認できるなど、EUの環境政策の最前線を垣間見ることのできる貴重な機会となりました。

(サステナビリティ・サイエンス研究機構)

医療事故の防止に関する講演会開催

歯学部附属病院では、7月30日(月)、D棟4階大講義室において、教職員及び学生等を対象に、医療事故の防止に関する資質の向上を目的として、講演会を開催しました。

当日は、栗石 聡歯学部附属病院院長が趣旨説明を行った後、神戸大学医学部附属病院医療安全管理室副室長の江原一雅先生から「安全な医療と医療事故・紛争の予防」と題し、第一線で医療事故の防止に取り組む医師の立場から、具体例を交えた講演が行われ、参加者約160名は熱心に聞き入っていました。

講演後には、参加者から多数の質疑が寄せられ、盛会のうちに終了し、医療事故の防止に関する認識と理解をまた一つ新たにしたいとの声が聞かれました。

(歯学部附属病院)



第13回スーパーコンピューティングコンテスト= 電脳甲子園—SuperCon2007—= 開催

サイバーメディアセンターと東京工業大学学術国際情報センターは、7月30日(月)から8月3日(金)まで、高校生・高専生を対象とした第13回スーパーコンピューティングコンテスト(略称 SuperCon2007)を開催しました。

本コンテストは、スーパーコンピュータを使用して、与えられた課題の解答法をプログラミングし、そのプログラムによる課題に対する解答の正確さと速さを競うものです。高校生・高専生を対象としたプログラミングコンテスト、しかも、スーパーコンピュータを使用しているコンテストを実施している大学は他になく、参加する高校生にとっても、実際にスーパーコンピュータに触れることのできる良い機会となっています。

今回、全国から応募のあった27校33チームの中から、予選を勝ち抜いた15校20チームが本選出場を果たし、そのうち7校10チームが東京会場で、8校10チームが大阪会場で、4日間にわたる熱戦をくりひろげ、最終日に各チームのプログラム結果の発表及び表彰式が行われました。

熱戦の結果、一関工業高等専門学校(岩手県)のチーム Snowdrop(奥田遼介君、菅原拓也君)が第1位となりました。

(サイバーメディアセンター)



平成19年度(第29回)基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」開催

基礎工学部公開講座「未来を拓く先端科学技術」が、8月6日(月)～9日(木)の4日間にわたり、基礎工学部国際棟(シグマホール)において開催されました。



研究室見学の様子

今年で29回を数える本講座は、基礎工学部からの情報発信の一環として昭和54年から毎年開催されており、地域社会と大学との連携を深めるための重要な役割を担っています。

今回は、基礎工学研究科、情報科学研究科、生命機能研究科及び太陽エネルギー化学研究センターの教員9名が、画像や動画を駆使し、自らの研究成果や科学技術について分かりやすく講義を行いました。また、講義終了後に実施した研究室見学も大変好評でした。

中学生から80代以上の方まで、135名の参加者が熱心に講義に取り組み、4日間の公開講座は盛況のうちに終了しました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

公開講座「教員のためのリフレッシュ講座」開催

平成19年度の言語文化研究科主催の公開講座が8月6日(月)から9日(木)までの日程で、中之島センターにおいて開催されました。今回で6回目となる本講座には、中・高のほか小学、大学の教員、学生など定員を大幅に超える74名が、近畿だけではなく中京・東海・関東等から参加されました。このように多くの受講者が集まったのは、パンフレット、雑誌『英語教育』『言語』のほか、教員間の口コミの情報もあったようで、自治体の教員研修など類いの講座がかなり増えているにも関わらず、本講座の講義内容の充実が評価された結果であると思います。

講座では各講師がそれぞれの専門的立場から、現場が直面する問題への考え方や対策のほか、IT時代の授業の魅力的な展開の仕方、生徒の理解を深め感動を与える文法や読解の授業のあり方などを、学術的な知見を踏まえ啓発するとともに、教室で応用できる多彩な内容を講義しました。運用英語についても、最新の音声学的知見(発音生理のMRI動画)や授業で使える発音指導法を示した上で、2クラスに分割して、ネイティブの先生による実践訓練を行いました。今年度は、英語担当教員の専門的知識の能力開発をさらに充実させる目的で、従来の学習英文法に加え、認知文法、語法の講義、さらに小学校英語実践の講義を設け、全体討議でも「小学校英語を巡る論議の問題点」を解説の上、活発な質疑応答を行いました。このため、開講日が一



日増えましたが、これは、昨年度の受講者のアンケートでの要望と変革期にある英語教育の動向に応える措置で、懇親会でも新たに各講師の発題と討議を行い、盛り上がりしました。

受講者のアンケートには、「普段疑問に思っていたことへの答えを見つめることができた」「予想以上に内容が濃く興味深い」「思わず内容にのめり込んでしまった」などの意見が記されており、各講師に対する評価・感想等は研究科のHPに掲載しています。

(言語文化研究科)

タイ王国Mahidol大学 Pornchai Matangkasombut学長に 大阪大学名誉博士の学位授与

タイ王国Mahidol(マヒドン)大学Pornchai Matangkasombut(ポンチャイ マタンカソンバット)学長に大阪大学名誉博士の学位が授与されました。

Pornchai 学長には、Mahidol 大学理学部と本学薬学研究科との部局間学术交流協定締結及び同大学と本学との学术交流協定締結に際して、多大な協力をいただくとともに、本学との交流を深めるべく本学の名誉教授4名に対する同学の名誉博士号授与に尽力していただきました。

また、工学部附属微生物工学国際交流センター(現・生物工学国際交流センター)において開始したユネスコ研修講座の実施に際して、多大なる助言等をいただき、同研修講座を国際的なものとしたほか、拠点大学方式による東南アジア学术交流プログラムにおけるタイ側コーディネータを務められ、タイ国と我が国との学术交流及び人材養成に貢献されました。さらに、これらの活動を進めるためにMahidol 大学理学部に両学の共同研究センターの設置を認め、研究室を無償で提供されており、同センターは現在もタイにおける拠点として活用されております。

一方、教育面において、Mahidol 大学から多くの留学生を本学に派遣するとともに、本学からの職員及び学生の受け入れなどに協力し、本学の国際化に貢献していただきました。このほか、1989年から1990年まで工学部附属生物工学国際交流センター外国人研究員(客員教授)として、同センターの教育研究に貢献するとともに、同センターの



外国人評価委員、薬学部外国人評価委員なども務めていただき、本学の教育研究改革にも貢献していただきました。

以上のように、Pornchai 学長は、長年に渡り本学との教育研究交流のみならず、我が国とタイ王国との学术交流にも多大なる貢献を果たしてこられ、7月18日開催の教育研究評議会において、名誉博士の学位を授与することが決定されました。

授与式は、8月10日(金)に、総長室において、Pornchai 学長夫人及びご令嬢の臨席のもと厳粛に執り行われ、総長から学位記が手渡された後、式辞があり、その後Pornchai 学長から謝辞が述べられました。授与式終了後は、生物工学国際交流センター主催の祝賀会が千里阪急ホテルにおいて催され、Pornchai 学長の名誉博士の学位授与を祝いました。

(研究推進部研究推進課)

総長室でドラマ撮影

6月25日(月)、8月15日(水)の両日に、事務局内の総長室、301会議室、役員会議室を使用し、テレビドラマの撮影が行われました。

このドラマは、10月6日(土)からスタートしたNHKド



総長室での撮影の様子(左が主演の西島秀俊さん)

ラマ「ジャッジ～島の裁判官 奮戦記～」で、撮影当日は、主演の西島秀俊さんや共演の浅野温子さん、中山 仁さん、岡田浩輝さんらが事務局を訪れ、大勢のスタッフとともに撮影に臨んでいました。



301会議室での撮影の様子

(総務部評価・広報課)

第3回カヌー講習会開催

大学教育実践センター・運動健康支援部門では、第3回カヌー講習会を、8月18日(土)・19日(日)の2日間、和歌山県田辺市の天神崎にて開催しました。事前に、阪大豊中地区のプールでシュノーケリングなど、2日間の講習を受けた参加者18名は、ナショナル・トラスト(自然環境の保全)運動の地にもなった、美しい講習場所に到着後、早速、カヌーの基本操作を教わりました。

初日の講師は、大学教育実践センターの平井富弘准教授、びわこ成蹊スポーツ大学の齋藤好史教授にご担当いただき、カヌーの基本操作に慣れた後は、湾の周辺を全員でツーリングし、岩場のスポットに到着後、シュノーケリングを楽しみました。また、夜は宿舎のご配慮により、海辺での海鮮料理バーベキューを開催し、参加者相互の懇親を深めました。

2日目は、カヌーの国際大会入賞経験もお持ちの、大戸文吾先生(和歌山県教育委員会)に、カヌーに関する基礎知識の講義をお願いしました。参加者からは、カヌーを趣



味として行うための具体的な方法や費用などの質問が多く出されました。

美しい海でのマリンスポーツを体験した参加者からは、ぜひ来年も継続して開催してほしいとの声が、多数寄せられていました。

(大学教育実践センター)

教職員懇親会開催

毎夏の恒例行事である教職員懇親会が8月20日(月)にアサヒビール株式会社吹田工場ゲストハウスで開催されました。この懇親会には、本学から総長をはじめとした役員の他、名誉教授、退職事務職員及び教職員が、また、アサヒビール株式会社からは福地茂雄相談役以下関係者が出席しました。



懇親会では、抽選会が催されるなど、終始和やかな雰囲気の中、出席者が互いの旧交を温め合い、盛会裡に終了しました。

(総務部総務課)

社会経済研究所第4回行動経済学研究センターシンポジウム開催

8月22日(水)、『ダイエットと経済学』をテーマに、社会経済研究所第4回行動経済学研究センターシンポジウムが、中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて開催されました。

本シンポジウムは、平成16年度に新しい学問分野である行動経済学の現実経済への有用性や魅力を、一般に紹介することを目的として始まりました。近年は「脳科学と経済学との対話」「経済学は実験できるか」といったテーマで、神経経済学や実験経済学の研究成果を分かりやすく紹介し、毎年数多くの方々に参加いただけてきました。今回も参加者は160名を数え、社会人、研究者、学生のほか、医療関係者の方にも参加いただきました。

今回は、一見経済学とは関係のなさそうな『ダイエット』をキーワードに、肥満度と貯蓄、負債との関係性や、肥満者を対象に行った経済実験の結果などについて紹介しました。アンケート実験の結果から、子供の頃、夏休みの宿題を最後に仕上げていた人に、肥満やギャンブル好き、喫煙者や負債を抱えている人が多いことを紹介すると、会場が大きくどよめきました。



講演は、京都大学大学院経済学研究科から西村周三教授を招き、本研究所から池田新介・大竹文雄両教授の3名が発表した後、筒井義郎行動経済学研究センター長・教授の司会で、一般参加者を含めてパネルディスカッションが行われました。多くの質問が出されて活発な質疑応答が行われ、行動経済学に対する関心の高さを示すシンポジウムとなりました。

(社会経済研究所)

宮原総長へ送別エール!

8月25日付けで任期を終えられた宮原秀夫総長に対し、退任に先立つ8月23日(木)事務局棟前広場において本学の応援団から、お世話になったことへの感謝、今後のさらなるご活躍の意味を込めて送別のエールが送られました。



(学生部学生支援課)

平成19年度大学説明会(オープンキャンパス)に13,587人が参加

8月10日(金)、17日(金)から24日(金)の間、学部別に日程を分けて大学説明会(オープンキャンパス)を開催しました。



入試課職員による個別相談

例年、文科系4学部、理科系3学部及び医歯薬系3学部のグループに分けて、同一グループ内で日程が重ならないよう調整し、参加希望者が複

数の学部を見学できるように工夫しています。

また、大阪大学と大阪外国語大学が統合し、平成20年度から大阪大学外国語学部として学生を募集することに伴い、7月28日(土)に大阪外国語大学のキャンパスにおいて、大阪大学外国語学部の大学説明会を開催しました。

参加者は外国語学部等の新設や好天に恵まれたことにより、昨年に比べて2,700人増えて、13,587人でした。

各学部では、学部・学科の内容紹介、入試概要の説明、大学及び学部紹介DVDの上映、研究室見学・模擬授業や個別相談コーナーなど多彩な内容で実施し、参加者には大変好評でした。(学生部入試課)

AEARU学生サマーキャンプに参加

東アジアの主要な17大学(日本では本学及び東京大学等6大学)が加盟しているAEARU(東アジア研究型大学協会)が主催する学生サマーキャンプが、8月19日(日)から25日(土)までの間、台湾の国立台湾大学で開催されました。このキャンプは、様々なプログラムを通じ、中国、台湾、韓国、日本のAEARU加盟大学から参加した学生同士が交流し、東アジアへの理解を深めるために学部学生を



中井さん(左から二人目)



川口さん(前列右から二人目)

対象に毎年開催されています。本年は、大阪大学から法学部4年の中井沙耶香さん、経済学部3年の川口諒太郎さんの2名が参加し、有意義かつ刺激的な一週間を送りました。「教養、デザイン力、国際性」を身につけるべく、来年以降も本学学生の積極的な参加を期待します。

プログラムの一部

Opening Ceremony(各大学の紹介)
Keynote Speech(東アジア経済のこれからについて)
Oriental Medicine Workshop(中国古代の鍼灸法と西洋医学との比較)
Company Visit(台湾の代表的ハードウェアメーカーGigabyteの工場見学)
Innovation Forum(アジアと西洋の文化比較)
Culture Experience(ガラス工房・美術館の見学、製作体験)
Feedback Presentation(キャンプの総括を各班で分担して発表)

このほか、台湾大学キャンパスツアー、台北市街や郊外への観光、故宮博物館見学等の娯楽行事を通じた学生交流・人脈作りが行われました。(国際部国際交流課)

平成20年度大阪大学大学院理学研究科・物理学専攻東京入試実施

理学研究科物理学専攻では、平成20年度の大学院博士前期(修士)課程入試の筆記試験を、8月27日(月)に東京都港区にあるキャンパス・イノベーションセンター東京で実施しました。筆記試験の合格者は、8月30日(木)に本学豊中キャンパスで面接試験を受けましたが、豊中キャンパスでも、物理学専攻と宇宙地球科学専攻の合同の大学院入試がほぼ同日で行われました。

大阪大学における大学院教育と研究を、より発展させるためには、地域の制約にとらわれず、有為な人材を広く受け入れることが重要です。そこで、人口の密集している東京を中心とした関東地区において、理学研究科物理学専攻に入学したいと希望している高い学問的能力と強い知的好奇心をもった学生が受験しやすいようにと、3年前からこ

の東京入試は行われています。

筆記試験後に、受験生にはアンケートに答えてもらいましたが、この東京入試は、受験案内も適切ということで好評でした。また、後輩たちのためでしょうか、来年も続けた方が良く、というアドバイスをほとんどの受験生からいただきました。

この東京入試を、より多くの受験生が知って利用してもらえるように、今後も努力を続けていきたいと思っています。



東京入試広報用ポスター

(理学研究科・理学部)

韓国教育行政官一行来訪

8月29日(水)、文部科学省の招聘により、韓国・生涯学習局女性教育政策課の徐暎珠(Suh, Young Ju)課長を団長とする教育人的資源部訪日団一行8名が、鷲田清一総長を表敬訪問し、小泉潤二理事・副学長、辻 毅一郎理事・国際交流推進本部長、今田幸二郎研究推進・国際部長(現研究推進部長)及び江藤靖弘国際交流課長が同席しました。

懇談・意見交換では、入試委員会副委員長の玉井 暉文学研究科教授と明田敏彦入試課長が、本学の入試制度についての説明を行い、さらに一行の関心事項であった本学の地方大学コンソーシアムについて、橋 弘治秘書係長から説明を受けました。

懇談終了後は、豊中キャンパスに移動し、8月にリニューアルオープンされてまもない総合学術博物館(MOU)を訪れ、阪大の長い歴史の中で培われた学術研究の成果等の数々を見学しました。

(国際部国際交流課)



平成19年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会及び2007年日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア開催

7月20日(金)に、留学生センターの主催により、コンベンションセンターで平成19年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会が開催されました。この協議会は、日韓両国政府からの奨学金によって、韓国の高校卒業者100名程度を毎年日本の国立大学理工系学部に入らせる事業(日韓プログラム)に携わる両国関係者が一同に会し、本プログラムの改善・発展に向けた協議を行うことを目的として毎

年開催されているものです。本プログラムも開始から8年がたち、本学には1期生から7期生までの38名が入学しています。今回の協議会では、すでに大学院修了者も出ている本プログラムの意義と将来について、本学に在学中のプログラム生も参加して熱心な議論が交わされました。

また、9月1日(土)には、本学が当番校となって、韓国・ソウルの国際教育振興院で、本プログラムの第9期筆記試験合格者150名とその保護者を対象とする推進フェアが開催されました。フェアでは、午前中に主催者から学生への説明等が行われ、引き続き午後からは、同院の1階・2階ロビー等に設置されたブースで、日本から参加した28大学による説明会が行われました。各ブースとも各大学の特色を活かしたプレゼンテーションが行われ、学生、保護者とも熱心に質問していました。

本学のブースでは、絶え間ない来訪者の熱心な質問に、説明対応の理学研究科、工学研究科の先生方も真剣に学部・研究科のPRに努めておられました。当日の通訳として参加してくれた3期生(1名)、本学に在学中の7期生(2名)、本年10月から本学に入学した8期生(7名)の方たちの協力のお陰で有意義な説明会を終えることができました。

(国際部学生交流推進課)



推進フェアの大阪大学ブース

法学研究科附属法政実務連携センター・高等司法研究科が公開講義開催

9月1日(土)、大阪弁護士会館において、近畿弁護士会連合会消費者保護委員会主催、法学研究科附属法政実務連携センター・高等司法研究科が共催する公開講義「法制審議会保険法部会における保険法改正の審議状況について～保険法の見直しに関する中間試案の解説～」を開催しました。当日は、弁護士、大学関係者、保険会社等の実務家等計101名が参加し、中間試案に対して質疑応答や意見交換が行われました。

講義では、法制審議会保険法部会の中心的役割を担ってこられた法務省民事局参事官の萩本 修氏をお招きし、中間試案に関する内容の概要、問題点の報告を1時間半にわたり行って頂きました。その後、10分間の休憩を挟み、大阪弁護士会所属弁護士で法務省に出向されている民事局付の嶋寺 基氏も加わり、当初の予定を30分延長して、1時間50分にわたり意見交換を行い、会場から出された多くの質問・意見に対応頂きました。

弁護士会主催の講演会に企業等の実務家や大学関係者等



が多数参加することはほとんどなく、多方向からの意見交換会の機会を企画したことに対し、弁護士会から感謝のお言葉を頂戴しました。今後も、このような多方向の意見交換ができるような企画を計画していきたいと考えています。

(法学研究科・法学部、高等司法研究科)

8大学工学系博士学生フォーラム開催

北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学(工学研究科及び基礎工学研究科)及び九州大学の工学系9研究科に在籍する大学院博士課程学生の交流を目的とした、第4回8大学工学系博士学生フォーラムが、コンベンションセンター及び医学部銀杏会館において9月3日(月)、4日(火)に開催されました。

本フォーラムは、特色GP「コアリッションによる工学教育の相乗的改革」の一事業であり、大学院博士課程学生が主となって企画立案し、企業委員、教員が支援するというユニークな方針で運営されています。今回は、学位取得後にどのような進路をとるかという点から、「多彩なドクター・キャリアパス」というテーマで実施されました。

第1日目は、特色GP代表の藤井信生東京工業大学理工学研究科長及び豊田政男工学研究科長の挨拶に始まり、安達喜一氏(クリングルファーマ㈱)による特別講演「理系研究者のキャリアチェンジ」が行われ、続いて産業界・ベンチャー・海外研究経験者・アカデミアからの各代表と学生を交えたパネル討論の後、「各キャリアで求められる博士像」についてグループ討論を行いました。

第2日目は、京都大学の吉田英生教授の話題提供を基にグループで討論を深め、グループごとの発表では斬新な意見提言が数多く飛び出しました。

2日間でのフォーラムでしたが、懇親会やナイトセッションを含むタイトなプログラムながら、学生、企業委員、



グループ討論風景



集合写真

教員相互の議論は宿舎でも深夜にまで及び、有意義な時間を共有することができたとの感想が聞かれました。

(工学研究科・工学部、基礎工学研究科・基礎工学部)

「女性研究者キャリア・デザインラボ」開室

9月5日(水)、鷲田清一総長、西田正吾理事・副学長(総合計画室長)の出席のもと、本学の女性研究者支援の拠点として設置された、「女性研究者キャリア・デザインラボ」の開室式が行われました。

同ラボは、平成19年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムに、多様な人材活用推進委員会が計画立案したプログラム「次世代に繋ぐ女性研究者サポート連鎖の形成」が採択されたことに伴って、特任准教授を迎え設置されたものです。

今後、

出産・育児・介護等で研究時間の確保が困難な女性研究者の研究面での支援を行う「研究支援員制度」の運用およびコーディネート

女性のキャリア・デザインに関する地域連携型学際的研究の推進

シンポジウムの開催

学生に対する講義やセミナーの提供



看板を掲げる鷲田総長、沖田知子室長(言語文化研究科教授)、西田理事・副学長(左から)

女性研究者ネットワークの構築による情報や問題の共有化

などを行っていく予定です。

(総務部企画推進課)

附属図書館で国立大学図書館協会シンポジウム開催

附属図書館では、本館6階図書館ホール(豊中キャンパス)において、9月5日(水)に国立大学図書館協会主催、国立情報学研究所共催、大学図書館近畿イニシアティブ協賛による「若きライブラリアンの海外大学図書館研修: Global Librarian Networkの形成を求めて」と題するシンポジウム(西日本会場)を開催しました。

このシンポジウムは、昭和61年以来、大学図書館の最新のトピックスをテーマにほぼ毎年、日本各地の国立大学を会場として開催されている「国立大学図書館協会シンポジウム」の19回目にあたるもので、本学としては平成7年の第8回シンポジウム以来の開催です。

今回のシンポジウムは、近年各大学で図書館員の海外研

修が増えてきたことを背景として、大学図書館員が海外で体験してきた研修成果を発表し、海外の大学図書館事情を広く周知するとともに、今後の我が国の大学図書館のグローバルな運営や展開に資することを目的として開催されたものです。9月19日(水)には、一部講演を変えて、筑波大学附属図書館(東日本会場)でも開催されました。

西日本会場では、国公私立大学や民間からの参加者を含めて109名の参加があり、イリノイ大学モートンソンセンターに研修に行かれた広島大学図書館の庄 ゆかり氏、ハーバード大学イェンチン図書館に研修に行かれた東京大学附属図書館の森 恭子氏、トロント大学図書館に研修に行かれた九州大学附属図書館の片岡 真氏の3名の講演とパネルディスカッションが行われました。

講演はそれぞれの観点から研修で得たことが述べられ、研修内容だけでなくその時の生活ぶりが伝わってくる興味深いものであったと好評で、「今回聞いた海外の事例等を参考として、今後の図書館サービスに活かしたい」との声も聞かれました。また、パネルディスカッションでは、海外研修に行った立場からだけではなく、送り出す側からの期待などについても言及され、参加者への「海外研修のすすめ」ともなっていて、海外研修への取組が今後一層高まっていくことを期待させるシンポジウムとなりました。

(附属図書館)



平成19年度大阪大学係長研修実施

平成19年度大阪大学係長研修が、9月11日(火)から13日(木)までの3日間にわたってコンベンションセンターを会場として行われました。

本研修は、係長及び係長相当の職にある者に対し、その職務遂行に必要な基本的・一般的知識を修得させるとともに、監督者としての能力及び識見を確立させ、大学行政の管理運営の重要な担い手としての職員の資質の向上を図ることを目的とし、本年度は他機関への出向者(5機関7名)を含む20名が受講しました。

なお、講義・演習については外部委託とし、(株)マネジメントサービスセンター浅芝正信氏を研修講師に迎えて実施されました。

研修は「我々を取り巻く環境変化」、「効果的な業務遂行とリスク管理」、「ビジネスシミュレーション～分析発表演習～」、「個人面談」といったカリキュラムで進められ、講義、班別討議などを通じて、活発な意見交換が行われるなど、全員が意欲的に取り組む姿勢がうかがえました。

中でも「ビジネスシミュレーション～分析発表演習～」では、班別に特徴のある発表が見受けられ、新たな発想を



垣間見る良い機会となりました。

研修最終日には、自己成長・実行計画書として、各人が、現状の自己分析、将来の目標、それを実現するための計画を作成しました。

今回の研修で、受講生は様々な意見交換を通じて理解を深め合い、厳しい中にも和やかな雰囲気の中で3日間の日程を終え、全員所定の課程を修了しました。

(総務部人事課)

NPO法人「阪大ワーク&ライフサポート」設立総会開催

9月13日(木)に、事務局において、NPO法人阪大ワーク&ライフサポートの設立総会が開催されました。

総会では、多様な人材活用推進委員会の沖田知子委員長(言語文化研究科教授)の開会挨拶の後、鈴木 直名誉教授(前理事・副学長)を議長に選任しました。引き続いて、鈴木議長の進行により、設立の意思の確認、法人認証申請に必要な書類の承認、設立当初の役員や設立代表者の選任等が行われました。なお、理事長には鈴木名誉教授、副理事長には、沖田教授、平ノ上昭夫氏(元文科系事務部長)の2名が選任されました。

設立総会での承認、決定を受けて、10月2日(火)に大阪府に認証申請を行いました。順調にいけば、来年の1月下旬から2月上旬に設立が認証される予定です。

(総務部企画推進課)



平成19年度近畿地区国立大学法人等パソコンリーダー研修実施

平成19年度近畿地区国立大学法人等パソコンリーダー研修（PowerPoint活用及びEXCEL2002活用の2講座）が、9月11日（火）から14日（金）までの4日間にわたり中之島センターにおいて開催されました。

この研修は、自己のパソコン能力向上のためだけでなく、



PowerPointを使ってプレゼンテーション演習を行う様子

研修後、各大学で習得した知識を広め、職場でのパソコン操作の補助等、事務職員の操作能力向上に貢献することを目的として開催され、PowerPoint活用においては50名（本学12名）が、EXCEL2002活用においては56名（本学24名）が受講しました。

研修では、富士通オフィス機器株式会社から講師を迎え、PowerPoint活用においては、与えられた具体的な課題についてグループ別にPowerPoint資料を作成し、実際にプレゼンテーションを行うという演習を行い、また、EXCEL2002活用においては、各種関数・ピボットテーブル・マクロ等の応用技術について、例題を基に個人別演習が行われました。

受講生は非常に積極的に演習に取り組み、グループ別のプレゼンテーションでは斬新な着想も披露されました。また、「今までにないリアルな研修で、実際の業務に役立つので、ぜひ今後もこのような研修を継続して行って欲しい」など、非常に有意義な研修であったとの感想が寄せられました。

（情報推進部情報企画課）

第5回慣性核融合科学とその応用に関する国際会議(IFSA '07)開催

第5回慣性核融合科学とその応用に関する国際会議（International Conference on Inertial Fusion Science and its Applications）〔略称：IFSA〕が、9月9日（日）～14日（金）、大阪大学主催、自然科学研究機構核融合科学研究所と日本原子力研究開発機構関西光科学研究所共催により、神戸国際会議場にて開催されました。

この国際会議は、高出力レーザーなどを用いたエネルギー開発（慣性核融合）とその関連研究分野に関する最も重要な国際会議で、2年毎に開催されているものです。

会議には世界19カ国から過去最高の487名が参加し、発表論文総数は470件に達しました。

今回の会議のハイライトは、現在米国とフランスで建設中の超大型レーザー装置による核融合点火実験計画と大阪大学における高速点火実験計画であり、各計画の進捗状況が報告されました。

また、阪大、日本原子力研究開発機構、英国大使館（東



京）等で、高出力レーザーと応用に関するサテライト会議が開催されました。

会議は、次回は2009年に米国西岸にて開催されることが予告されたのち、大盛況の裡に終了しました。

（レーザーエネルギー学研究センター）

産業科学研究所と北海道大学電子科学研究所が 連携研究(アライアンス)の推進に関する協定を締結

産業科学研究所と北海道大学電子科学研究所は、ネットワーク型による戦略的基盤技術開発研究の推進に関する協定を9月20日(木)に締結しました。

産業科学研究所は、新産業創造物質基盤技術における新たな物質創製をテーマに、東北大学多元物質科学研究所との附置研究所間連携事業として「中核的研究拠点間アライアンス実現に向けたポストシリコンの戦略的研究」(ポストシリコン物質・デバイス創製基盤技術アライアンス)を平成18年度から開始しており、平成19年度からは、北海道大学電子科学研究所と東京工業大学資源化学研究所がこれに加わり、4研究所間の連携事業へと発展しました。本事業は、各研究所がそれぞれ得意な分野で相互に連携を図り、相補的・協力的なネットワーク型による戦略的基盤技術開発研究を推進することを目的としています。

本協定は、双方の人的・物的資源の積極的活用により、今後、こうしたネットワーク型の連携研究を一層効果的に推進することをねらいとしているものであり、10月1日(月)には産業科学研究所にアライアンス・ラボが開設され、北



協定書を交わす笹木電子科学研究所長(右)と川合所長

海道大学電子科学研究所の研究者を受入れるなど、従来の枠組みにとらわれない新たな連携研究推進の体制が整備されました。

(産業科学研究所)

第1回大阪大学教職員テニス教室開催

大学教育実践センター・運動健康支援部門では、第1回大阪大学教職員テニス教室を、9月8日(土)、15日(土)、22日(土)の3日間、豊中キャンパステニスコートにて開催



しました。講師を医学系研究科(大学教育実践センター兼任)の河野史倫助教が担当し、18名の中級~中上級者を対象に、実践へ応用できる技術・戦術を習得するための練習メニューを行いました。

連日30℃を超える猛暑の中、午前・午後合わせて4時間の長丁場となるレッスンでしたが、「まだまだやりたい」とばかりにスタッフも含め全員が時間いっぱいコート中を駆け回るといった光景が見られるほど、非常にアクティブなテニス教室となりました。新しい技術や練習方法に戸惑いながらも、必死に取り組む様子も見受けられました。最後にはみんな連絡先を交換し合いテニスの約束をするなど、吹田・豊中キャンパス間の隔たりなく、学内でのテニス仲間の輪を広げることができたと思います。参加者からは、「ぜひ次回も参加したい」との声を多数いただきました。

(大学教育実践センター)

新旧総長歡送迎会開催

9月25日(火)、任期満了により退任された宮原秀夫前総長と新たに就任された鷲田清一総長の新旧総長歡送迎会が、リーガロイヤルホテルで開催されました。

はじめに、発起人を代表して西田正吾理事・副学長の挨拶の後、宮原秀夫前総長及び鷲田清一総長の挨拶が行われました。

引き続き、熊谷信昭元総長の発声で乾杯が行われ、現教職員との歓談の後、宮原前総長への花束贈呈、岸本元総長による万歳三唱が行われ、和やかな雰囲気の中で名残を惜しみつつ閉会となりました。



(総務部総務課)

大学院学位記授与式挙行

9月26日(水)、コンベンションセンター MO ホールにて、大学院学位記授与式が行われました。今回学位を授与されたのは178名(修士20名、課程博士100名及び論文博士58名)を数え、受領代表者14名に鷲田清一総長から学位記が授与されました。列席した修了者は、総長から「ある領域でのスペシャリストであるだけでなく、社会のなかの真のプロフェッショナルのひとりになっていただきたい。」と激励を受けました。

(総務部総務課)



大学院学位記授与式総長式辞

本日ここに博士及び修士の学位を得、授与式を迎えられたみなさん、おめでとうございます。学位を得られたみなさんは、これから、この大阪大学という枠から独立し、社会のさまざまな領域で先端の専門研究者として行動してゆかれることになります。その門出を、まずは心よりお祝いを申し上げます。それと同時に、長いあいだにわたってみなさんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々に対しても、深い敬意を表したいとおもいます。

みなさんは、それぞれの研究領域において、言うまでもなくスペシャリストです。科学の特定領域のスペシャリストになるためにみなさんがこれまで積み上げてこられた研鑽は、みなさんのこれからの人生においても、きっと大きな自信につながることでしょう。寝食を忘れて何かに没頭したという経験は、まちがいなくみなさんの人生の大きな財産になることでしょう。

ところで、スペシャリストであるということは、プロフェッショナルであるということとはいささか異なります。スペシャリストというのは、ある限られた領域、限られた方法のなかで、その道を究めたひとのことです。学問がいやましに専門分化してゆくなかで、スペシャリストがスペシャリストとして認知される範囲は、どんどん狭くなってゆくばかりです。かぎりなく精緻ではあるが、その議論が通用する世界は狭い、それを理解できるひとと少ない、隣の研究室のひとですらその内容が正確には理解できない、それが現代の科学研究におけるスペシャリストの実情です。

一方、プロフェッショナルというのは、修得したその専門的な知識や技能をとおして、同時代のひとびとのあいだで、社会的な責任というものの一端を担いうるひとのことです。問題を提起するだけでなく、問題を解決する、そのマネジメントができるひとのことであり、またそういう責任を果たすことに進んで身を投じてゆくことのできるひとのことです。

たんなるスペシャリストであるだけでなく、真のプロフェッショナルになるために必要なこと、それはいったい何でしょうか。

いまから七十年ほど前に、スペインの思想家、オルテガ・イ・ガセットというひとが、大きく変貌しつつある西欧社会のありようを「大衆の反逆」と名づけ、専門性の意識というものが深く抱え込む錯誤について、きわめて厳しい批判をおこないました。ここでいう「大衆」とは、言うまでもなく「大衆社会」の「大衆」のことですが、注意する必要があるのは、その典型として批判の矛先を向けられているのが、「市民」という大衆ではなく、むしろそれまで（そして当時も同じく）精神的貴族とみなされていた知的専門職、とりわけ科学者と行政官僚だということです。

科学者に向けての言葉はとくに辛辣であり、「今日のも



っとも『教養』ある人びとが、信じられないほどの歴史的無知に陥っている」としたうえで、オルテガはこう言います。「1890年代に歴史上前代未聞の科学者のタイプが現われた。それは、分別ある人間になるために知っておかなければならないすべてのことのうち、一つのみ特定科学だけしか知らず、しかもその科学のうちでも、自分が積極的に研究しているごく小さな部分しか知らないという人間である。そして、彼は自分が専門に研究している狭い領域に属さないいっさいのことを知らないことを美德と公言し、総合的知識に対する興味をディレンタンティズムと呼ぶまでになったのである」と言ったのです。

「専門性」という名のもとにサイエンティストは自己の限られたレパートリーのなかに閉じこもる。他の領域、つまり自分が無知である領域にまで発言するのは越権としてみずから禁じる。裏返していえば、他の領域の専門家を自分の専門領域に受け容れようとしぬ。こうした「自己の限界内に閉じこもりそこで慢心する人間」がはびこりつつある、そうオルテガは警告したのです。

原発事故、医療過誤、建築における耐震偽造、研究者によるデータ改竄、個人情報流出、天下り官僚の仲間内の利害誘導、行政の不祥事隠蔽……と、科学・技術や行政への信頼をものはや維持しがたくするような事件が、二十世紀の終わり近くなってからひっきりなしに頻発してきました。

これらの事件は、だれもがナイーブなまま、思考停止したままにいられる社会は、じつはとても危うい社会であることを浮き彫りにしたはずで、ところが、だれも、いずれだれかが是正してくれるだろう、と漫然と期待しているだけで、みずからはその是正のために動かない。つまり、だれも実際には責任をとろうとしない。

ここでわたしは十七世紀フランスに生きたある思想家の言葉を思い出します。そのひと、ブレーズ・パスカルはこう書きました。「われわれは絶壁が見えないようにするために、何か目をさえぎるものを前方においた後、安心して絶壁のほうへ走っている」と。パスカルのこの言葉はいま異様なほどリアルに感じられます。

わたしはいま、みなさんにある領域でのスペシャリスト

キャンパスニュース

であるだけでなく、社会のなかの真のプロフェッショナルのひとりになっていただきたいと強く望んでいます。言うまでもなく、だれも社会で起きていることのすべてに責任をとることなどできようはずはありません。それにはひとりひとはあまりに小さいです。けれども、スペシャリストとして、その専門的な知見にもとづいて、広く社会に起きている問題に対してもの申すことはできます。この点に関しては、これ以上進むと危ないと発言することはできません。

そう、みなさんには、磨かれたその専門的な知見を、その専門の外にいるひとに対して、広く発信していただきたいのです。その専門的な知見を、社会のさまざまな領域につなげていってほしいのです。

プロフェッショナルとは、なによりも、みずからの専門的な知見を、社会のさまざまな声に十分耳を傾けながら、社会に活かしてゆくことのできるマネジメント能力と、社会が抱え込むさまざまな困難に立ち向かい、その責任の一端を担おうという意識を強くもつ専門家のことなのです。そしてそのようなプロフェッショナルになるためには、じぶんの専門的な知見がもつ社会的な意味を問い、それを、深い歴史的な教養を背景に、有効に活かしてゆけるひとのことです。ある限られた領域の専門家でありながら、社会に対し包括的な展望をもってその専門的な知見を活かしてゆけるひと、それがプロフェッショナルです。



もうお分かりのこととおもいますが、プロフェッショナルとなるにいちばん必要なのは、じつは、広くて深い「教養」というものなのです。大阪大学の学位を得られたみなさんに、なによりも深い「教養」のある専門家になってもらいたいという、わたしの強い願いをお伝えすることで、本日学位を授与されたみなさんへのわたしからのなむけの言葉とさせていただきます。



第46回全国七大学総合体育大会得点表(最終結果)

		参加 校数	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学	
			順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点
アイスホッケー		6	3	6	1	10	不参加		2	8	5	3	6	2	4	4
スキー競技		5	不参加		不参加		2	8	3	6	4	4	1	10	5	3
馬術		6	3	4	2	6	4	3	5	2	1	8	該当団体なし		6	1
グライダー		7	7	1	2	8	4	4	3	6	1	10	6	2	5	3
柔道		7	3	5	2	8	5	3	6	1.5	1	10	6	1.5	3	5
少林寺拳法		7	4	4	6	2	3	6	7	1	1	10	2	8	5	3
硬式テニス	男子	7	6	2	2	8	7	1	1	10	4	4	3	6	5	3
	女子	7	7	1	2	8	1	10	5	3	4	4	3	6	6	2
ソフトボール		6	該当団体なし		5	2	4	3	6	1	2	6	1	8	3	4
空手道		7	6	2	5	3	1	10	7	1	3	6	2	8	4	4
水泳	男子	7	3	6	6	2	5	3	4	4	2	8	1	10	7	1
	女子	7	1	10	3	6	5	3	6	2	4	4	2	8	7	1
剣道	男子	7	6	2	1	10	4	4	3	6	2	8	5	3	7	1
	女子	7	1	10	4	4	3	6	5	3	6	2	7	1	2	8
バスケットボール	男子	7	1	10	6	2	2	8	5	3	3	6	4	4	7	1
	女子	7	3	6	1	10	7	1	2	8	5	3	4	4	6	2
陸上競技	男子	7	7	1	2	8	5	3	1	10	4	4	3	6	6	2
	女子	7	2	8	4	4	6	2	1	10	3	6	7	1	5	3
フェンシング		5	4	3	2	6	5	2	該当団体なし		1	8	3	4	不参加	
ラクロス	男子	6	5	3	6	2	2	8	不参加		4	4	1	10	3	6
	女子	7	4	4	6	2	1	10	3	6	2	8	5	3	7	1
バドミントン	男子	7	2	8	3	6	4	4	6	2	5	3	7	1	1	10
	女子	7	1	10	5	3	7	1	2	8	4	4	6	2	3	6
準硬式野球		7	5	3	6	2	4	4	1	10	2	8	3	6	7	1
バレーボール	男子	7	1	10	7	1	2	8	6	2	4	4	5	3	3	6
	女子	7	3	6	4	4	5	3	2	8	6	2	7	1	1	10
硬式野球		6	不参加		5	3	6	2	2	8	4	4	3	6	1	10
自動車		7	3	6	2	8	5	3	7	1	4	4	1	10	6	2
体操		7	1	10	6	2	3	6	4	4	7	1	2	8	5	3
ハンドボール		6	2	8	5	3	1	10	4	4	3	6	6	2	不参加	
ソフトテニス	男子	7	4	4	7	1	5	3	6	2	3	6	1	10	2	8
	女子	7	2	8	6	2	7	1	3	6	1	10	4	4	5	3
弓道	男子	7	5	3	4	4	1	10	7	1	3	6	2	8	6	2
	女子	7	4	4	1	10	5	3	7	1	2	8	6	2	3	6
アーチェリー		7	5	3	6	2	4	4	7	1	3	6	2	8	1	10
ゴルフ		6	5	3	3	6	6	2	2	8	1	10	4	4	不参加	
卓球	男子	6	5	3	1	10	6	2	4	4	3	6	2	8	7	1
	女子	6	3	6	6	2	2	8	4	4	7	1	1	10	5	3
ヨット			*	1	*	1	*	1	*	1	*	1	*	1	*	1
総 得 点			184		181		173		166.5		216		199.5		140	
順 位			3 位		4 位		5 位		6 位		1 位		2 位		7 位	

*ヨット競技は、天候不順で開催されておりません。(大会規約により、参加校に1点加算)



開会式駅前イベント(京都)



自動車部

飛行機制作研究会アルバトロスが鳥人間コンテストで審査委員特別賞受賞

大阪大学飛行機制作研究会アルバトロスは、ユニークな飛行機で鳥人間コンテストに出場することを目的として、2005年に3人で立ち上げられたサークルです。2006年にはメンバーも13人に増えて、昨年開催された第30回鳥人間コンテスト選手権大会には無尾翼の飛行機で出場しましたが、強度不足で、飛んだとはいえない結果に終わりました。

今年は設計をやり直し、無尾翼やダオスシステムなど、他のチームにはないものを開発し、とにかくユニークな機体を作り上げて第31回大会に出場しました。そして、「滑空機部門フォーミュラークラス」において37.3mという記録を出すとともに、審査委員特別賞を受賞しました。



審査委員特別賞は、斬新でユニークな機体を制作したチームに贈られる賞で、「無尾翼で斬新な翼型の機体に果敢にチャレンジした」という理由で受賞しました。

来年も、よりユニークに斬新に美しく設計し直した機体で、鳥人間コンテストに出場し、審査委員特別賞だけでなく、200m以上飛行し、「滑空機部門フォーミュラークラス」での優勝を目指すための活動がすでに始まっています。

(飛行機制作研究会アルバトロス)

工学部 / 工学研究科ギャラリー 開設

8月10日(金) オープンキャンパスにあわせて、工学研究科 GSE コモンウエスト棟 1階ロビーに、工学部 / 工学研究科ギャラリーが開設されました。展示内容は、映像も用いた歴史コーナー、最新の教育・研究内容を紹介する学科 / 専攻展示など多岐に渡っています。

オープン当日は、オープンキャンパスに来学した高校生、保護者のほか、工学研究科の教職員もギャラリーを訪れ、展示物等に熱い視線を注いでいました。

ギャラリーは常設展示となっておりますので、近くにお越しの際はお立ち寄りください。

(工学研究科・工学部)



森川敬信名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授森川敬信先生は、7月8日(日)、逝去されました。享年84歳でした。

先生は、昭和21年9月大阪帝国大学工学部を卒業、同年9月堀機械工業株式会社に入社、昭和22年3月より不動化学工業株式会社勤務を経て、昭和22年10月大阪大学工学部助手に採用され、昭和30年4月同講師に昇任、昭和

36年5月同助教授に昇任、昭和36年9月大阪大学工業教員養成所に配置換えとともに教授に昇任、昭和44年4月同工学部教授に配置換えとなりました。

先生は、粉粒体の空気輸送に関する研究、特に、装置設計において重要となる管路内の圧力損失の研究を中心として顕著な業績をあげられるとともに、粉体工学会副会長を務められるなど、学会活動においても多大な貢献をされました。昭和62年3月に大阪大学を停年退官された後も、大阪産業大学教授、財団法人ホソカワ粉体工学振興財団常務理事を歴任された他、学会活動においても固気二相流分野の中心メンバーとして日本混相流学会の設立に参加され、同学会理事、日本機械学会評議員を歴任されました。

平成12年春には、以上の教育研究活動に対するご功績に対し、勲三等旭日中綬章が授与されています。

ドイツとクラシック音楽を愛し、誠実で穏やかなお人柄で、学生と後進を見守っていただいた森川敬信先生のありし日のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学研究科・工学部)

岡田 正名誉教授(医学部)逝去



本学名誉教授岡田 正先生は、8月19日(日)、甲状腺癌のため逝去されました。享年69歳でした。

先生は、昭和38年3月大阪大学医学部を卒業され、同大学附属病院で実地修練後、昭和43年3月に医学博士(大阪大学)の学位を授与されました。その後、昭和46年7月助手、昭和55年10月講師を経て、昭和57年2月に小児外科教授に就任されました。平成10年4月には附属病院長として、わが国における最初の脳死心臓移植を実現されました。平成14年3月に定年退官し、その後は大阪府立母子保健総合医療センター総長を務められました。

研究面では、外科代謝栄養学を強く推進し、中心静脈栄

養法(高カロリー輸液法)の我が国への導入の中心的役割を務めました。中でも、静脈栄養時の亜鉛欠乏症は世界初めての報告であり、これによりヒトにおける微量元素の生理機能が注目されるに至りました。また、中心静脈栄養液製剤、小児用アミノ酸製剤、ビタミン剤、微量元素製剤などを開発し、我が国における中心静脈栄養法の進歩に貢献しました。さらに、静脈経腸栄養法を中心とした院内栄養治療システムを提唱、さらに適応の拡大、栄養アセスメントの確立、(必須)微量元素・ビタミン類・栄養学的の意義の解明、病態別栄養法の確立、在宅静脈栄養法の実用化を我が国において推進し、これら一連の業績により、平成9年日本医師会医学賞を授与されました。

小児外科学の分野では、特に新生児外科学、小児がん、肝胆膵外科、大腸肛門外科さらに臓器移植学(肝臓・小腸)など専門分野の発展に努め、それぞれ指導者を育成しました。学会関係では日本外科学会(理事)、日本小児外科学会(理事長、会長)、日本外科代謝栄養学会(理事長、会長)などに属し、それぞれの役員を長年にわたって務め、また多くの学会の会長として学術集会を開催、各学会の発展に貢献されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(医学系研究科・医学部)

加賀有津子准教授、松村暢彦准教授、上西啓介准教授、倉敷哲生准教授、清野智史講師、村田雅人准教授「日本工学教育協会JSEE研究講演会ポスター発表賞」受賞

工学研究科ビジネスエンジニアリング（BE）専攻の加賀有津子准教授、松村暢彦准教授、上西啓介准教授、倉敷哲生准教授、清野智史講師、村田雅人准教授が、日本工学教育協会JSEE 研究講演会ポスター発表賞を受賞しました。

日本工学教育協会は、我が国における技術系人材の育成のために、産・学・官が一体となって活動している唯一の公的機関です。今回、受賞の対象になった発表は、8月3日（金）～5日（日）、東京・日本大学にて開催された第16回日本工学教育協会全国大会における「ビジネスエンジニアリング専攻の工学教育の取り組み - OJE 法による実践型演習 - 」であり、今年から設けられたポスターセッションにおいて、計42のポスター発表の中から最優秀に選ばれました。これは、BE 専攻における新たな教育方法として、産業界で活躍するリーダー育成を目的に、自ら積極的に企画・立案から問題解決までを行い、少人数グループでの討論や発表、役割分担を通じて、判断力・決断力を育成する実践型演習であるOJE（On the Job Education）教育手法をまとめたものです。

授賞式は、8月5日（日）、日本工学教育協会大会の席上で行われ、賞状が授与されました。

（工学研究科・工学部）



現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「国際的な人材養成に資するコンテンツの開発」グループが「平成18年度第16回日本工学教育協会賞 論文・論説賞」受賞

サイバーメディアセンターの西川美香子特任助手、工学研究科の中嶋幹男特任講師、岩井千春特任研究員、福井希一教授、情報科学研究科の岸野文郎教授、神戸大学の小笠原史恵さんの研究グループが、「平成18年度第16回日本工学教育協会賞 論文・論説賞」を受賞しました（所属等はいずれも論文発表当時）。

日本工学教育協会は、我が国における技術系人材養成のために、産学官が一体となって活動している唯一の公的機関です。創立40周年を記念して工学教育の分野において貢献度の著しい個人、会誌に発表された優秀な工学教育論文及び優れた教科書・参考書の著者に対し、功績賞、論文賞及び著作賞等の協会賞を年次大会時に贈呈しており、8月3日（金）、同協会より第55回年次大会の会場となった日本大学理工学部にて、標記賞状および賞牌がグループを代表して岩井特任研究員に授与されました。対象となった論文は、工学教育、54巻、3号、pp.117-122に掲載されたもので、タイトルは「グローバルコンピテンシーの習得を目的としたe-Learningによる専門英語教育コースの創設」です。これは主に、平成17年に文部科学省により選定された現代GPに関わるe-Learningを用いた専門英語教材の開発研究に関する内容で、実用的な専門英語教材の開発研究とその運営方法、学習効果を取りまとめたものです。英語分野の専門家のみならず、全学からの各専門分野の教員により、専門英語教材の開発から導入まで、組織化された取り組みが高く評価されました。



（工学研究科・工学部、情報科学研究科、サイバーメディアセンター）

福井希一教授「日本植物細胞分子生物学会賞 技術賞」受賞

工学研究科生命先端工学専攻細胞動態学領域の福井希一教授が、日本植物細胞分子生物学会の「2007 年度日本植物細胞分子生物学会賞 技術賞」を受賞しました（共同受賞者：大阪府・岩本 嗣主任研究員、中曽根 渡主任研究員、京都府立大学・平井正志教授、神戸大学・近江戸伸子准教授）。日本植物細胞分子生物学会は、分子生物学および細胞工学の基礎研究とその応用・開発研究の発展を目指し、理学、工学、農学などの多分野における研究者の協力と研究交流を目的とし、1981 年に設立された学会です。技術賞は、上記分野で実用化された、または実用化間近の特に顕著な研究成果に対して与えられる賞で、毎年 2 件程度の研究に贈られています。

今回の技術賞は、バイオテクノロジーを用いて大阪府の特産野菜の育種を行った実用的研究が、高く評価されて授与されたものです。福井教授が開発した新しい染色体可視化法やゲノム識別法が育成過程に取り入れられ、新しいフキ品種やミズナス品種が合理的に生み出され、これらの新品種は、大阪府の特産野菜として、現在は広く実用栽培・市販されています。

授賞式は、8 月 8 日（水）、第 25 回日本植物細胞分子生物学会（千葉）大会・シンポジウムにおける総会／授賞式席上で行われ、賞状が授与されました。



（工学研究科・工学部）

三間 圀興教授「Edward Teller Medal」受賞

レーザーエネルギー学研究センター長の三間 圀興教授が、9 月 13 日（木）に Edward Teller Medal を受賞しました。本賞は、慣性核融合科学とその応用分野におけるパイオニア的成果及びリーダーシップに対して、米国原子力学会より授与されるものです。

今回の受賞は、三間教授が長年取り組まれてきたレーザープラズマ物理とレーザー核融合科学への理論シミュレーション研究による貢献に対して授与されたものであり、特に、レーザープラズマの安定性の理論・シミュレーション研究、高速点火に関わる高強度レーザーとプラズマの相互作用の解明における先駆的・先導的な成果と、我が国における FIREX プロジェクト（高速点火方式を用いたコンパクトなレーザー核融合点火の実証プロジェクト）推進を牽引したリーダーシップが、国際的に高く評価されたことによるものです。

授賞式は、9 月 9 日（日）から 9 月 14 日（金）にわたって神戸国際会議場にて開催された「第五回慣性核融合科学及びその応用に関する国際会議（5th International Conference on Inertial Fusion Sciences and Applications: IFSA07）」のバンケットにおいて行われました。授賞の翌日には記念講演が行われ、若かりし日の先生が参加された国際ワークショップでの集合写真を挟み、レーザー核融合研究の黎明期を振り返りながら研究成果が紹介されました。刺激を与えてくれた多くの研究者と、研究を支えてくれた多くの卒業生への深い感謝を交えながらの講演となりました。



（レーザーエネルギー学研究センター）

新役員紹介

武 田 佐知子 (たけだ さちこ)

理事・副学長(社会学連携担当)



【略歴】

- 昭46. 3 早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業
- 52. 3 早稲田大学大学院文学研究科史学(日)専攻修士課程修了
- 60. 3 東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了
- 60. 3 文学博士(東京都立大学)
- 60. 4 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 平 9. 1 大阪外国語大学教授外国語学部
- 19.10 大阪大学教授大学院文学研究科
- 19.10 国立大学法人大阪大学理事・副学長

新部長紹介

杉 本 孝 司 (すぎもと たかし)

外国語学部長



【略歴】

- 昭46. 3 大阪外国語大学外国語学部英語学科卒業
- 48. 3 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了
- 48. 4 大阪外国語大学助手外国語学部
- 52. 1 大阪外国語大学講師外国語学部
- 57.10 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 平 5. 1 大阪外国語大学教授外国語学部
- 11.11 大阪外国語大学学生部長(平12.3まで)
- 12. 4 大阪外国語大学副学長(平15.2まで)
- 19.10 大阪大学教授大学院言語文化研究科
- 19.10 大阪大学外国語学部長(平21.9まで)

高 橋 明 (たかはし あきら)

世界言語研究センター長



【略歴】

- 昭54. 3 大阪外国語大学外国語学部インド・パキスタン語学科卒業
- 57. 6 インド国デリー大学大学院ヒンディー語文学科修士課程修了
- 58. 3 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了
- 62.10 大阪外国語大学講師外国語学部
- 平 3. 1 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 14. 1 大阪外国語大学教授外国語学部
- 18. 4 国立大学法人大阪外国語大学学長特任補佐(平19.9まで)
- 19.10 大阪大学教授世界言語研究センター
- 19.10 大阪大学世界言語研究センター長(平21.9まで)

新部長紹介

奥 西 峻 介 (おくにし しゅんすけ)

日本語日本文化教育センター長



【略歴】

- 昭45. 3 大阪外国語大学外国語学部ペルシア語学科卒業
- 47. 3 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
- 50. 3 京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学
- 50. 4 大阪外国語大学助手外国語学部
- 54. 1 大阪外国語大学講師外国語学部
- 57.10 大阪外国語大学助教授外国語学部
- 平 3. 4 大阪外国語大学助教授留学生日本語教育センター
- 4. 1 大阪外国語大学教授留学生日本語教育センター
- 9. 4 大阪外国語大学留学生日本語教育センター長
(平17.3まで)
- 17. 4 大阪外国語大学教授日本語日本文化教育センター
- 17. 4 大阪外国語大学日本語日本文化教育センター長
(平18.4まで)
- 19.10 大阪大学教授日本語日本文化教育センター
- 19.10 大阪大学日本語日本文化教育センター長(平20.3まで)

豊 田 政 男 (とよだ まさお)

サステイナビリティ・デザイン・センター長



【略歴】

- 昭42. 3 大阪大学工学部溶接工学科卒業
- 44. 3 大阪大学大学院工学研究科溶接工学専攻修士課程修了
- 44. 4 大阪大学助手工学部
- 46. 4 大阪大学助手工学部附属溶接工学研究施設
- 47. 5 大阪大学助手溶接工学研究所
- 48. 7 工学博士(大阪大学)
- 48.12 大阪大学助手工学部
- 49.11 大阪大学助教授工学部
- 平元. 7 大阪大学教授工学部
- 10. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 16. 4 大阪大学大学院工学研究科長・工学部長(平20.3まで)
- 19. 8 大阪大学総長補佐(平20.3まで)
- 19.10 大阪大学サステイナビリティ・デザイン・センター長
(平20.3まで)

審 良 静 男 (あきら しずお)

免疫学フロンティア研究センター拠点長



【略歴】

- 昭52. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 59. 3 大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
- 59. 2 日本学術振興会奨励研究員
- 60. 2 カリフォルニア大学バークレー校博士研究員
- 62. 6 大阪大学助手細胞工学センター
- 平 7. 5 大阪大学助教授細胞生体工学センター
- 8. 1 兵庫医科大学教授生化学講座
- 11. 4 大阪大学教授微生物病研究所
- 19.10 大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授
- 19.10 大阪大学免疫学フロンティア研究センター拠点長
(平25.3まで)

新施設長紹介

仁 田 義 雄 (にった よしお)

附属図書館箕面分館長



【略歴】

- 昭46. 3 神戸大学文学部文学科卒業
- 48. 3 東北大学大学院文学研究科修士課程修了
- 50. 3 東北大学大学院文学研究科博士課程退学
- 50. 4 大阪外国語大学助手外国語学部
- 52. 1 大阪外国語大学講師外国語学部
- 53. 4 京都教育大学講師教育学部
- 54. 4 京都教育大学助教授教育学部
- 57. 4 大阪女子大学助教授学芸学部
- 63. 4 大阪大学助教授文学部
- 平 3. 5 文学博士(大阪大学)
- 9.10 大阪外国語大学教授外国語学部
- 18. 4 大阪外国語大学外国語学部国際文化学科長(平19.3まで)
- 19. 3 大阪外国語大学附属図書館長(平19.9まで)
- 19.10 大阪大学教授大学院言語文化研究科
- 19.10 大阪大学附属図書館箕面分館長(平21.9まで)

盛 岡 通 (もりおか とおる)

大学院工学研究科附属サステイナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター長



【略歴】

- 昭44. 3 京都大学工学部衛生工学科卒業
- 46. 3 京都大学大学院工学研究科衛生工学専攻修士課程修了
- 49. 3 京都大学大学院工学研究科衛生工学専攻博士課程単位修得退学
- 49. 4 大阪大学助手工学部
- 50. 1 工学博士(京都大学)
- 51. 4 大阪大学助教授工学部
- 平 5. 3 大阪大学教授工学部
- 10. 4 大阪大学教授大学院工学研究科
- 16. 4 大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー専攻長(平18.3まで)
- 19.10 大阪大学大学院工学研究科附属サステイナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター長(平21.9まで)

新教授紹介

金 井 好 克 (かない よしかつ)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭59. 3 群馬大学医学部医学科卒業
- 63. 3 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了
- 63. 4 東京大学助手医学部
- 平 3. 4 ハーバード大学ブリガム・アンド・ウィミズホスピタル
- 5.12 杏林大学講師医学部
- 8. 4 杏林大学助教授医学部
- 13. 4 杏林大学研究教授医学部
- 16. 4 杏林大学教授医学部
- 19.10 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科薬理学講座(生体システム薬理学)

専門分野：薬理学

新教授紹介

瀬 恒 謙太郎 (せつね けんたろう)

大学院工学研究科



所 属：大学院工学研究科電気電子情報工学専攻集積エレクトロニクス講座
専門分野：酸化物エレクトロニクス、機能性薄膜学

【略歴】

- 昭47. 3 大阪大学基礎工学部電気工学科卒業
- 49. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻修士課程修了
- 49. 4 松下電器産業(株)技術本部中央研究所研究員
- 60. 2 工学博士(大阪大学)
- 60.11 松下電器産業(株)技術本部中央研究所主任研究員
- 62.11 松下電器産業(株)中央研究所部品材料基礎研究所主任研究員
- 平元. 8 松下電器産業(株)研究本部中央研究所物質科学研究室長
- 10. 4 神戸大学大学院自然科学研究科客員教授(平19.8まで)
- 10.10 松下電器産業(株)研究本部中央研究所主幹研究員
- 11. 4 松下電器産業(株)研究本部中央研究所研究管理担当参事
- 13.10 松下電器産業(株)先端技術研究所グループマネジャー
- 17. 4 松下電器産業(株)コーポレートR&D戦略室先端技術総括担当参事(平19.8まで)
- 17. 4 大阪大学ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構特任教授(平19.8まで)
- 19. 9 大阪大学教授大学院工学研究科

平 岡 泰 (ひらおか やすし)

大学院生命機能研究科



所 属：大学院生命機能研究科細胞ネットワーク講座
専門分野：細胞生物学、生物物理学

【略歴】

- 昭55. 3 京都大学理学部卒業
- 57. 3 京都大学大学院理学研究科修士課程修了
- 60. 3 京都大学大学院理学研究科博士課程修了
- 60. 3 博士(理学)(京都大学)
- 60. 4 日本学術振興会奨励研究員
- 60. 5 カリフォルニア大学サンフランシスコ校流動研究員
- 63. 5 カリフォルニア大学サンフランシスコ校研究員
- 平 1. 9 カリフォルニア大学サンフランシスコ校ハワード・ヒューズ医学研究施設研究員
- 3. 4 通信総合研究所主任研究官
- 4. 7 通信総合研究所関西支所生物情報研究室長
- 13. 4 通信総合研究所基礎先端部門関西先端研究センター生物情報グループリーダー
- 16. 4 独立行政法人情報通信研究機構基礎先端部門生物情報グループリーダー
- 18. 4 独立行政法人情報通信研究機構第一研究部門未来ICT研究センター上席研究員
- 19.10 大阪大学教授大学院生命機能研究科

野 海 博 之 (のうみ ひろゆき)

核物理研究センター



所 属：核物理研究センター核物理実験研究部門
専門分野：原子核物理学(実験)

【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学理学部物理学科卒業
- 62. 3 大学大学院理学研究科前期課程修了
- 平 2. 9 大阪大学大学院理学研究科後期課程単位修得退学
- 2.10 高エネルギー物理学研究所助手
- 3. 6 理学博士(大阪大学)
- 9. 4 高エネルギー加速器研究機構助手素粒子原子核研究所
- 11. 4 総合研究大学院大学助手数物科学研究科併任
- 14. 4 高エネルギー加速器研究機構助教授素粒子原子核研究所
- 16. 4 総合研究大学院大学担当助教授高エネルギー加速器科学研究科
- 19. 4 高エネルギー加速器研究機構准教授素粒子原子核研究所J-PARCセンター素粒子原子核ディビジョン員兼務
- 19. 9 大阪大学教授核物理研究センター

東風西風

宇宙を究める核物理研究

江 尻 宏 泰



現在、研究や講義、シンポジウム・ワークショップで欧米に滞在する事が多い。「東風西風」という題なので、アメリカやヨーロッパから見た大阪大学の原子核研究の発展について若干述べる。大阪の原子核研究は、日本（全国）の共同利用研究センターを経て、世界の研究センターへ発展してきた。それは世界に生き宇宙を究めるセンターである。

大阪大学の創立期は、世界の原子核物理の草創期に当る。原子模型の長岡初代総長のもと、わが国の気鋭の研究者が大阪大学に集まり、原子核研究がスタート。菊池教授らの原子核反応実験、湯川博士の中間子論（1948

年ノーベル賞）など世界的研究が生まれた。

戦後、原子核実験用のサイクロトロンは、基礎物理にも環境汚染にも無知な米国当局によって大阪湾に沈められた。そこで日本の原子核研究を復興すべく、菊池教授、朝永教授を始め全国の研究者が集まり、東京近郊に全国共同利用の原子核研究所 INS を創立。1955 年で、世界の原子核が大きく発展しようとしている時だ。私は東大理学部 3 年にあり、原子核研究を志す。INS の最先端加速器の建設には、阪大グループが大いに腕を振った。

私は東大の理学系大学院での 5 年とその後の 4 年間 INS で原子核構造の研究に従事する。「自由、独立、独創」の進取の気風あふれる INS からは世界的研究が生まれた。

1967 年から 2 年間はワシントン大学、その後の 1 年はコペンハーゲンで研究に専念した。欧米では研究所や研究室の垣根はない。各国からの自主性ある研究者が、自由に交流しながら独創的研究をエンジョイしている。私も 31 歳の若さで独立のグループを作り独自の研究を展開する一方、大学院の講義を担当、多くの院生を指導した。

1971 年、最新の加速器を擁する全国共同利用の核物理研究センター（RCNP）が、全国の研究者の総意と協力のもと、吹田キャンパスに設立された。これには理学部の若槻教授（第十代総長）、山辺教授（初代 RCNP センター長）、近藤教授等のおお阪大学の原子核研究者の貢献が大きい。こうして大阪の研究施設は全国規模の日本の研究センターに発展した。

RCNP の創立にあたり、阪大創立期や INS 創立期の場合のように、全国から新進の研究者が集まってきた。私もヨーロッパから帰り、阪大理学部に在籍、RCNP の建設と研究のスタートに没頭した。1976 年に実験研究が始まり、全国の研究者により、興味ある研究が盛んに行われた。1986 年には池上センター長のもと、世界最高性能のリングサイクロトロンと主測定装置の建設が始まり、1992 年に研究が再開された。

私は 1993 年、センター長として RCNP に移り日夜研究に励む。高性能の実験装置を持つ RCNP には世界各国から研究者が来訪し、国際シンポジウムも度々開かれた。RCNP はわが国の全国共同利用のセンターから、各国の研究者が参加し研究する、世界に開かれた「国際」研究センターになる。

1990 年代半ば、Spring8 を利用したレーザー電子光クオーク核物理、大塔コスモ（地下）観測所新設によるニュートリノ・レプトン核物理の 2 プロジェクト^{註1,2)}をスタートさせた。これらには、わが国の納税者の御協力と、当時の金森総長、伊達理化学部長、北村大塔村長等を始め財団法人高輝度光科学センター JASRI 他の関係当局のご尽力による所が大きい。国内はもとより、各国から優れた研究者がこぞってプロ

プロジェクトに協力参加した。

国内外の研究者との交流を推進するべく、3つの研究ネットワークを形成した。中高エネルギー核子・中間子核物理のMESON (Medium Energy Science Open Network)、レーザー電子光によるクォーク核物理等のAPPEAL (Advanced Physics with Photons Electrons And Lasers^{註3})、二重ベータ崩壊とニュートリノ・レプトン核物理のDBD (Double Beta Decay - Network^{註4})の3つである。いずれも世界の主要な原子核研究所長ないし研究プロジェクト代表が協力参加した。

当時、RCNPは、世界の研究者や国内外の若い大学院生の集まる世界の核物理のセンターとして活況を呈した。研究プロジェクト公募、プロジェクト審査、評価、セミナー・シンポジウム等には、原則英語で常に国内外から多数の研究者が参加。固定した研究室も部門もなく、研究上では教授や助教の区別もない。存在するのは世界各国から自由に参加し、最先端を拓く自主独立の研究者である。これは世界の基礎科学の研究所なら当たり前の事で、世界的に見て、普通の研究センターになったと言える。あえて「国際」等をつけるまでもない。

「国際」、「全国」、「研究室」また「名誉教授、教授、助教」や狭義の「研究方針」などの枠組みから開放される事が重要だ。活発な研究者なら世界の誰でも自由に研究活動ができる研究センターから、基礎科学の独創的研究は生まれる。宇宙物質の究極の解明を目指し、新たな展開を期待したい。

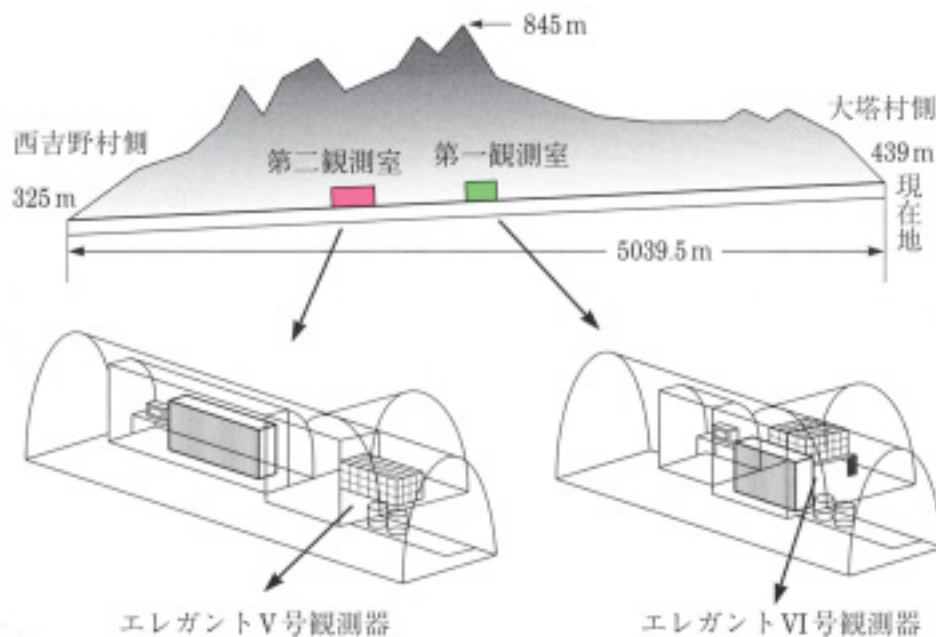
註1．クォーク・レプトン核の世界 しょう華房、量子的世界 大阪大学出版会。

絵で見る物質の究極 極微の世界で踊る素粒子 ブルーボックス 講談社。

註2．電子線・ガンマ線核分光と原子核物理 (英文) オックスフォード出版

註3．<http://www.spring8.or.jp/e/conference/appeal>

註4．<http://www.rcnp.osaka-u.ac.jp/ejiri/DBD-Lett>



大塔コスモ観測所。ELEGANT (ELEctron GAMma-ray Neutrino Telescope) による謎の素粒子ニュートリノや謎の宇宙物質ダークマターの研究が進められている(註1)。

えじり・ひろやす

プロフィール

核物理研究センター名誉教授 平成11年退官。専門 素粒子核物理、クォーク・ニュートリノ核物理。ワシントン大学客員教授等を経て、国際高等研究所フェロー、チェコ工科大学(原子核科学)客員教授。

第48回大阪大学まちかね祭

今年のテーマは「彩(いろどり)」

今年も大阪大学豊中キャンパスで、11月2日(金)～11月4日(日)の3日間、『彩』をテーマに第48回大阪大学まちかね祭を開催します。

近年サークル活動などがますます活発になり、まちかね祭においても日頃のクラブ・サークル活動における成果の発表、あるいは野外ライブ、講演会、スポーツ大会、模擬店等様々な企画が行われ、本学学生のみならず学外からも多くの来訪者で賑わっています。

皆様のお越しをお待ちしております。

開催期間：11月2日(金)～11月4日(日) 10:00～

開催場所：大阪大学豊中キャンパス(豊中市待兼山町)

アクセス：阪急電車宝塚線「石橋駅」下車、徒歩15分

大阪モノレール「柴原駅」下車、徒歩10分

主なイベント：LIVE IN HANDAI (3日 17:30～@メインステージ)

Miss & Mr. 阪大 2007 (4日 16:00～@メインステージ)

サークル大決戦～まちかね山の戦い～

(3日 13:00～@サブステージ)

FINALE (4日 13:00～@メインステージ)

詳しくは、まちかね祭ホームページ「MACHIKANE FESTIVAL 2007」(<http://www.machikanesai.com/>)でご確認下さい。

(大学祭中央実行委員会)



大阪大学室内楽アンサンブル第5回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル(OUCE)は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。大阪大学の大学祭行事の一環として年に2回(春・秋)MOホールにおいて演奏会を開催し、毎回の皆様にご来聴をいただいております。

このたび第5回演奏会を下記の通り開催いたしますので、皆様お誘い合わせの上ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

詳しくはOUCEのホームページ(<http://www.mls.eng.osaka-u.ac.jp/ensemble/>)をご覧ください。

問い合わせ先 tsukuda@chem.eng.osaka-u.ac.jp, horii@biken.osaka-u.ac.jp

日時：11月3日(土) 会場 13:30、開演 14:00

場所：大阪大学コンベンションセンター MOホール

入場無料

(演奏曲目)

コレルリ	クリスマス協奏曲 Allegro-Pastorale : Largo
ショパン	ピアノ三重奏曲 ト短調 作品8 第1楽章
シュミット	三重奏のためのソナチネ
チャイコフスキー	弦楽六重奏曲 ニ短調 作品70 『フィレンツェの思い出』
ハイドン	弦楽四重奏曲「ひばり」
ブルッフ	8つの小品より 1, 6, 7
ドヴォルザーク	ピアノ五重奏曲 イ長調 第2番 作品81 第1楽章
レスピーギ	リュートのための古風な舞曲とアリア 第3番

♪ 休憩時間中、ホールロビーにてリコーダー演奏を行います♪

ディズニー映画ピノキオより『ハイ・ディドゥル・ディー・ディー』、少年時代

他

(大阪大学室内楽アンサンブル)



大阪大学総合学術博物館第7回企画展
「くるみ座の半世紀 関西新劇の源流」
京都が生んだ劇団の軌跡

くるみ座は、毛利菊枝らによって1946年に京都で創設された新劇の劇団です。
新劇の劇団としては古い歴史をもち、人見嘉久彦、山崎正和、徳丸勝博ら多くの劇作家や俳優、演出家を輩出し、関西のみならず日本演劇史においては重要な地位を占めています。
2007年3月にくるみ座は解散することとなりましたが、その上演関係の資料のほとんどが大阪大学に寄贈されました。本企画展は、このくるみ座のおよそ半世紀の活動を、残された台本、演出台本、舞台写真、ポスター、チラシなどの資料によって再構築するものです。

期 間：11月1日(木)～12月22日(土)
開館時間：10時～16時30分(日・祝は休館。ただし11月3日(土・祝)・4日(日)は開館)
会 場：大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館
主 催：大阪大学総合学術博物館
共 催：大阪大学大学院文学研究科

問い合わせ先：大阪大学総合学術博物館事務局 TEL 06 - 6850 - 6284

(総合学術博物館)



工学研究科・工学部がラジオ番組を開始

工学研究科・工学部は、昨年度に引き続き、平成19年10月から平成20年3月までの半年間、高校生、受験生及び保護者を対象に、工学研究科・工学部の魅力をアピールするため、朝日放送ラジオ(1008kHz)にてラジオ番組「どんなんかな? 阪大工学部」を開始しました。

番組の内容は、工学研究科・工学部の教員による研究紹介のコーナーや、卒業生・在学生等が現在の活躍分野や将来の夢を語るコーナー、キャンパスライフなどを取材するコーナーなど、工学系学部への興味を引くものとなっており、工学系学部の志願者の増加につながることを期待しています。

初回の放送では、豊田政男工学研究科長が出演し、「高校生の皆さんにアドバイスを」との要望に対し、「高校生活は何事も一生懸命行う時期であるが、時間をうまく使ってほしい。また、感動することで次の活力が生まれる。」と答えるなど、受験生への応援メッセージを熱く語りかけていました。



初回分の収録風景(右奥が豊田工学研究科長)

「どんなんかな? 阪大工学部」

放送時間：毎週日曜日 21:30～22:00

(工学研究科・工学部)

平成19年度適塾記念講演会

本学では、適塾記念会との共催で、緒方洪庵及び門下生の業績を顕彰するとともに、事業の一つとして毎年記念講演会を開催し、大阪における新しい学術、文化の成果をお伝えしております。

今年度も次のとおり開催いたしますので、多数のご参加をお待ちしております。

日 時：11月28日(水) 18時～20時

会 場：大阪大学中之島センター10階 佐治敬三メモリアルホール

(大阪市北区中之島4-3-53 TEL 06-6444-2100)

講演1：「考古学から見た古墳時代河内政権論」大阪大学大学院文学研究科教授 福永伸哉

講演2：「肝臓病といかにつきあうか」大阪大学医学部附属病院長 林紀夫

受講料：無 料(会場定員 190名 先着順) 事前に下記「問い合わせ先」までお申し込みください。

問い合わせ先：大阪大学総務部総務課総務係 TEL 06-6879-7014

(総務部総務課)

人権問題に関する講演会

人権問題に関する啓発行事の一環として、講演会を下記のとおり開催します。

今回は同和問題をテーマに取り上げ、講師の角岡伸彦氏と人権問題委員会委員の平沢安政教授(人間科学研究科)との対談形式により、同和問題をめぐる重要課題についてお話しいただきます。

教職員・学生の積極的な参加をお待ちしています。また、近隣地域の方々にも多数ご参加いただきますようご案内いたします。

日 時：12月12日(水) 14時～16時

場 所：基礎工学部シグマホール

講 師：角 岡 伸 彦 (ジャーナリスト)

演 題：「部落問題の今を語る」

問い合わせ先：大阪大学総務部総務課総務係 TEL 06-6879-7014

(総務部総務課)

国際シンポジウム「エラスムス・ムンドゥスと日欧大学間学術交流のための新戦略」

国際交流推進本部国際企画室では、国際シンポジウム「エラスムス・ムンドゥスと日欧大学間学術交流のための新戦略」を12月18日(火)に中之島センターで開催いたします。欧州における「ボローニャ・プロセス」という学位・課程の標準化や、「エラスムス・ムンドゥス(EM)」という大規模人材交流・育成プログラムについての最新の動きと同時に、EMに関連した本学の国際化の取り組みを内外に紹介する企画です。ぜひ、多くの方々に参加いただきますよう、ご案内します。

日 時：12月18日(火) 13時～16時30分

会 場：大阪大学中之島センター10階 佐治敬三メモリアルホール(定員先着120名)

主 催：国際交流推進本部国際企画室

共 催：「海外先進教育実践支援プロジェクト」、「若手研究者ITP」(理学研究科)「大学国際戦略本部強化事業」

内 容：EU本部のEM政策担当者、およびR・ワーグナー氏(オランダ・グローニンゲン大学EM担当官)による基調講演と本学・国内大学関係者を含めたパネルディスカッションを予定。

参 加 費：無料(終了後の交流会は会費制)

申込方法：E-mailまたはFAXで、氏名、ふりがな、機関(部局)名、住所、TEL、メールアドレス、交流会出席の有無を下記の問い合わせ先までお送り下さい。

問い合わせ先：大阪大学国際交流推進本部国際企画室(渡部)

TEL&FAX 06-6879-4017 E-mail: watanabe@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp

国際交流推進本部ホームページ <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/international/iab/index.html>

(国際交流推進本部)

大阪大学未来基金

大阪大学では、大学の財政基盤を強化し、将来の教育研究活動のより一層の充実を図ることを目的に、本年4月「大阪大学基金」を創設いたしました。

寄付金は、より質の高い環境のもとで新しい知を育むために、「社会貢献、国際交流、学生支援、施設整備」の充実に活用いたします。

これまで、本学の卒業生のみならず、各方面から多数ご寄付をいただいております。引き続き、大阪大学の進化を担う未来基金へのご協力をお願い申し上げます。

今回、感謝の意を込めまして、本紙面に、現在ご寄付をいただいております方々のご芳名を掲載させていただきます。（敬称は省略させていただきます）

■ ご寄付をいただきました皆様へ

・ 感謝状の贈呈

ご寄付いただいた皆様に感謝の心を込めて、大阪大学総長から感謝状を贈呈します。

・ 寄付者のご芳名

大阪大学及び大阪大学後援会のホームページにご芳名を掲載し、長く大阪大学の歴史に刻ませて頂きます。

・ 高額寄付者顕彰プレート

一定額以上のご寄付をいただいた方には、ご芳名をプレートに記し大阪大学中之島センターに掲示させていただきます。

ゴールドプレート 500 万円以上（累計額）のご寄付者

シルバープレート 100 万円以上（累計額）のご寄付者

ブロンズプレート 50 万円以上（累計額）のご寄付者



10月9日（火）、大阪大学未来基金に高額のご寄付をいただきました望月和子名誉教授（本年2月22日ご逝去）のご遺族（望月宏子様）に対し、鷲田清一総長から感謝状を贈呈いたしました。

左から西田正吾理事・副学長、鈴木 直名誉教授（前理事・副学長：望月名誉教授の愛弟子）、望月弘子様、鷲田総長

平成 19 年 大阪大学未来基金寄付者御芳名

平成19年10月5日現在

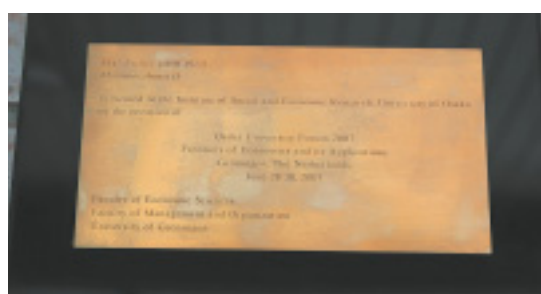
[illegible]

コ	近藤雅臣	後藤業明	小舟浩治	甲谷直樹	小泉勇	小寺道高	小竹正男
	小橋純久	小竹泉靖雄	小林正英敏	近藤林啓次郎	泉玉慶智夫	小林	小西秀正
サ	坂井啓人	澤井公一	相良和伸	崔和圭	齊藤博宣	澤田敦一	佐々木亮
	堺敏昭裕	阪野井俊一	阪口和人	才川寛隆	笹尾内重正	財前太彦男	佐々木守弘次
	佐藤靖晋歌	澤村献栄	佐藤信義	佐々木利幸賢	佐桜井喜彦	三作哲男	佐々木文三
シ	塩本一海	清水純寛	柴田起夫	進藤明夫	嶋谷泰明	塩野隆史	志磨成也
	篠田和久貴健	篠田井達郎徹	城野政隆志	清水石從男	嶋田地常之	白木孝子	東海林信二
ス	鈴木不二男	鈴木一三九	須川幸彦	鈴木仁一郎	杉本圓諦	末兼宏	末廣元昭
	杉浦正輝直	鈴木康久仁一	杉本崇勝	菅家惣一郎実	杉山孝美	鈴木裕夫	杉原昭淳
セ	関得一郎	銭林裕昇	妹島五彦	瀬尾秋衛	関川一彦	千田康文	
ソ	園田孝夫	園田昇					
タ	高橋昭二	田中宏治	谷口和弘	田村勤一	竹内正明	田中秀雄	田中藤八郎
	田中典一	田中直文	口島義明	竹村陽一	瀧本忠司	中裏二吾	中谷口茂彦
	滝本哲信	藤本市紅太郎	田代裕龍太郎	高野順吉	高田由雅和	滝谷孝誠	田玉本元希
	谷坂博宏	垣宏章一	田澤芳信也	田口和正	谷川雅忠	田中誠人	田村内潤之
	田下信彦	滝沢英謙次郎	谷川玉木	珠渕高杉	竹下垣中	竹村正憲	竹内寛和
	田内康二	高瀬謙次郎	玉木秀昭	高安	田中	田中	田中
チ	茶園成樹	丁野昌純	千原秀昭				
ツ	津田賢三	辻野太郎	辻井純郎	土屋文夫	佃幹夫	津山晃一郎	辻野儀一
テ	寺井幸司	出羽皎					
ト	東郷武一郎	富田奈留也	土肥昭治	豊島久真男	飛松敏美	富田禎一	戸川晴雄
	友廣一研	戸上幹健三	百海顯清成	東海明人	道居宏克	岡部義輝久	土井弘修平
ナ	中村安秀	中村辰雄	中野三宏	中桐義隆	中田俊士	南村友彦	中野延也
	那須恒彦	中塚比呂記	中岡憲男	中村觀善也	中村圭吾	中村治方	中村廣治
	中川八凱	中川史明人	中田憲武	中島昌敏	中岡和穂	中村純子	中村弘
	中野まゆみ	中原英理					
ニ	二瓶文博	西田正吾	西山敬	西村友一	西川七雄	西村雅敬	西馬重幸
	新田百合子	西田圭弘	西山内	西村浩	西村利武	西岡嘉治	西木孝雄
ネ	根岸愛子	根本紀夫					
ノ	野島博三	乃田国雄	野村正勝	野上良亮	野上真嗣	野崎園子	野嶋将晴
	野阪泰三	則末尚志	野田浩男	野上津敬一	野島正朋		

ハ	濱田康男 番典二 林守宏 早川巖	長谷川一郎 馬場善博 畑橋田進	濱岡利之 土生信弘 服部祥次	林孝美 濱口智幸 長谷川貞和	橋本輝夫 花崎伸度 橋田靖哉	花房伸祐 馬場靖哉 長谷川誠一	畑中忠和 濱田星紀 長谷川清
ヒ	東野武史 広瀬勇	東平島健	檜垣匡彦	東山博吉 兵頭宏二	東山昇	平松誠一	平石康博
フ	藤村育雄 藤原毅 藤本義夫 藤原邦高 藤岡順次 藤岡秀樹	深尾利津雄 藤川克躬 藤田昌英 藤見洋子 福永秀春	福永肇 森行雄 不二門尚彦 藤見克彦 藤田佐金彌	普天間悟 藤井浩一 深瀬博茂 古澤博好 藤本好司	藤居長門 藤川陽次 藤田躬興 福井英夫	藤居洋子 福田日出男 藤林房祥 藤本祥弘 古本林弘	藤井正久 藤本竹登 藤原新吾 藤野美保 深井満男
ヘ	別所健一						
ホ	本田孝雄 細谷正信	星加定明 堀孝正	細馬芳博 堀部潔	程野廣茂 穂積幸男	保田豊	堀内司朗	堀江常夫
マ	松井誠 横野幾輔 間瀬正隆 松尾雅次 松崎大助 榊田敬玄 松林玄悦	松本昌泰 前村靖典 政田和洋 榊本裕之 松尾秀一郎 松井康雄 松永秀樹	松浦虔士 前田芳彦 前島健治 松永義滋	正岡徹 松井誠一郎 松本光昭 松浦泰則 丸橋徹英	松浦孝治 増田博己 松田安弘 松原敏嗣 丸山亨厚	松下宏宗 戸博章 山原毅弘 松岡正毅	松枝啓之 谷鷹太郎 松本和夫 前田健蔵 松下勝幸
ミ	湊三宅嘉 三品広美	三木秀夫 三原正忠 宮崎忠彦	水野卓巳 宮原福淳	宮内秀雄 三好新一郎 宮川トシ	三輪省三 宮西秀典 村西憲一 村上雅樹	三宅正夫 三谷澄一 村山和伸 向井伸幸	光定和男 宮木義好 宗本健一
ム	宗石敏子 村上敬一	村上慶夫	宗川義嗣 岡浩爾	宗近道郎 向井達彌	森康憐 森岡俊夫	森谷洋介 森田智津子	森俊彦 茂木美穂
モ	毛利悦造 森田太郎 森直一	本岡孝之 森英和子	森谷泰久				
ヤ	藪田紀一 山田陽二 山本信枝 山崎達芳 山下克史 山野康三	山田博弘 山西善章 矢島武禎 山崎禎幸	山本尚三 山田徹秀 安井木俊 八崎中茂	山賀禮一 山中千代衛 山口謙太郎 山名一夫	大和谷厚 谷崎吉平 山口仁松 山崎孝紀	安矢聖英 山野一幸 山本海三 山北直義 山田高泉	山崎圭治 山村惠司 崎田享人
ユ	弓狩康三	行正幸司					
ヨ	吉岡一誠 吉田崇生	横井浩之 米倉彦昌	吉川孝彌 吉田守雄	蓬知代朗 吉村克悟	吉村博明 吉田寿男	吉井時雄 吉田定宏 脇坂儒	吉田浩雄 龍正明
ワ	若林昭	和田道順	和田晴	和田悟朗	若井寿男		

M.C.Escher 作の版画(社会経済研究所)

社会経済研究所 1 階玄関正面壁面に、M.C.Escher (1898-1972, Netherland) 作の版画「Metamorphosis」が設置されました。これは、今年の 6 月 28 日(木)から 30 日(土)にかけてオランダ・グローニンゲン大学で開催された『大阪大学フォーラム 2007』の記念品として、グローニンゲン大学から贈られたものです。本研究所が研究する行動経済学が人々の行動が必ずしも合理的ではなく、心理に影響されることに注目するものであることと、M.C.Escher の作品が人々の視覚の特性を利用したものであること、その両者には通じるものがあるという理由で選んでいただきました。



(社会経済研究所)

訂正とお詫び

阪大 NOW No.98 (2007 年 8 月号) の掲載内容の一部に誤りがありましたので、下記のとおり訂正するとともにお詫びいたします。

・阪大 NOW No.98 P49 人事「新部長紹介」 栗本英世 グローバルコラボレーションセンター長の【略歴】中
(誤) (正)

昭50. 3 京都大学文学部卒業

昭55. 3 京都大学文学部卒業

52. 3 京都大学大学院文学研究科修士課程修了

57. 3 京都大学大学院文学研究科修士課程修了

ラオスから日本に

工学部2年 ソスパン スックサワート（ラオス）



■ ラオスから日本に

ラオスから来ました、ソスパン スックサワートといいます。工学部環境・エネルギー工学科の2年です。「私はラオスから来ました。」といっても、「ラオスって、どこ？」とよく聞かれるので、簡単にラオスを紹介します。ラオスは東南アジアにあります。5カ国に囲まれて、海に接しておらず、8割は山地です。公用語はラオ語で、主な宗教は仏教です。そのために、人々の生活は仏教の影響を大きく受けています。町にはお寺が多く建っており、静かな国です。

日本人はラオスのことを知っている人が少ないように思いますが、ラオスでは日本は良く知られています。なぜかという、車などの日本製品が多く輸入されているからです。そして、日本のアニメもラオスの少年に大人気です。さらに、日本からのボランティア団体、組織などが、向こうでも活動していることも理由の一つです。このようなことから、私は日本について知り、日本という国に行ってみたいと考えるようになりました。そして縁があって、日本に留学することになりました。日本の生活はラオスと比べたら、とても忙しいです。そして、気候もよく変化するので、人間も調節しないとけません。最初はなかなか慣れませんでした。だんだん慣れてきました。日本で一番ビックリすることは、毎日、忙しい生活しているのに、自分の文化（お祭りなど）のための時間をよく確保し続けていることです。これには感動しました。



■ 大学での生活

日本での生活のほとんどは、学校と自分のアパートです。時間が空いたら、自分の趣味の、ギターを弾いたり、留学生団体等の交流会への参加したり、そして、大阪の周りを旅行したりすることが多いです。私は、まだ2回生なので、多くの授業科目は一般科目です。やはり、環境のことは幅が広いので、いろいろなことを身につけないといけません。4回生になって私の研究したいテーマは、もちろん環境およびエネルギーについてで、例えば水の汚染、新エネルギー（バイオマス、太陽電池など）です。そして、もっとも重要なことは、日本で勉強したことが、ラオスでも活かせるということです。ラオスは発展途上国なので、経済を優先すると、どうしても、森林伐採、ゴミ、汚染などで環境に被害を与えてしまいます。その環境問題を減らすことが一番やりたいことです。



和歌山での魚釣り

■ 将来の夢

将来は日本で学んだ専門知識・高度な技術を活かして、ラオスの発展に貢献したいと思います。まだまだ先のことですがこれからも頑張ります。

日本への留学

工学研究科博士前期課程2年 マイナ ヴィクタ（ケニア）



■ 私の故郷

ジャンボー！これはケニアで使うスワヒリ語の挨拶です。私はケニアの北西部にあるナクルという町から来ました。ナクルは観光地として有名で、多くの観光客が世界中からナクル湖にいるきれいなフラミンゴを観に行きます。ナクルの気候は大阪の秋とよく似ていて、秋になると故郷のことを思い出します。私の故郷の標高は1,860mと高いため、年中涼しいのです。

■ 日本への留学

日本への留学を決めた理由は、日本の技術がケニアのような発展途上国に合っていると思ったからです。ケニアでは、日本といえば「最新テクノロジー」のイメージが強いのです。また、日本製の電気製品等は耐久性、効率性と安全性に優れているため、皆に愛されており、【日本製】はブランドの取り扱いを受けています。ケニアから出発したとき「日本のすばらしい技術を身に付けよう」という熱い気持ちで日本にきました。



■ 日本での生活

日本での最初の2年間は言葉と文化の勉強で大変でした。普段の日常生活を送るのが難しく、諦めて帰りたいと思う時期もありました。しかし、時間が経つにつれて友達ができ、段々日本の文化もわかってきて、日本語も上達するようになりました。サッカーサークルに入部し、留学生会

の委員になって、たくさんのイベントで新しい仲間を作りました。そして研究室において、ゼミ旅行や飲み会、学会などに他の学生、教員と一緒に参加することで、学生生活が楽しくなりました。



私の専攻は地球総合工学ということで、「動物・植物・環境」と直接関係している研究をしていると思われることが多いのですが、私は鋼製橋脚の耐震性能について研究しています。なぜこの研究を選んだのかというと、ケニアの社会基盤はこれから発展していくので、安全性と耐久性、効率性を持った設計をしなければならないと考えたからです。

■ 将来の夢

日本へ留学して、異なる文化を理解することで自分の文化についての理解を深めるということがわかりました。そして今まで教育に興味があったことから、将来は交流と教育、社会と関係している仕事をしたいと思っています。

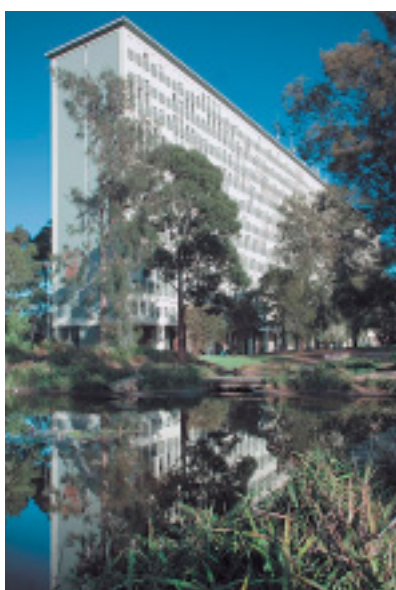


モナシュ大学

Monash University



1958 年、ビクトリア州初の総合大学として創立されたオーストラリアの州立大学です。現在、国内に 6 キャンパス、及びマレーシア、南アフリカに各 1 の計 8 キャンパスを擁し、ロンドンとイタリアのプラトにセンターを持ちます。学部は芸術、人文科学、経済・経営、教育、工学、情報、法学、医学、薬学、理学の 10 です。1966 年に大学の授業として日本研究プログラムを開始し、1981 年にはモナシュ日本研究センターを開設しており、ビクトリア州の日本研究の拠点ともなっています。センターには、日本マンガのライブラリーが設置されており、日本語・日



本文化への関心の高さがうかがえます。連日、ライブラリーには学生が訪れ、交流の場としても役立っています。

2006 年の時点での学生数は 54,872 人（うちマレーシアキャンパスに 3,145 人、南アフリカキャンパスに 900 人）、また教職員数は 6,786 人です。外国人留学生は、全学生数の 31.2% を占めています。

大阪大学は、モナシュ大学と 1996 年に大学間協定を締結し、以来、研究交流と学生交流を行ってきました。

また、交換留学に加え、春季に語学研修プログラムをモナシュ大学ランゲージセンターで実施しており、ホームステイしながら英語の授業を受け、学校訪問等もすることができます。



日本研究センター内のマンガライブラリー

Monash University

<http://www.monash.edu.au/contact/>

編集後記

平成 19 年 10 月 1 日、大阪大学と大阪外国語大学は統合し、“新生”大阪大学となりました。統合シンボルマークのように、10 の球体（学部）が繋がった一つの環に、新たに一つの球（外国語学部）を加えて、大きな一歩を踏み出したところです。新たな仲間を迎えての様々な変化の中、進み行く大阪大学を、今後も『阪大 NOW』を始めとする広報誌や、統合を機にリニューアルしました「大阪大学ホームページ」を通じて広くご紹介していきたいと思ひます。

今月号から新たにこの阪大 NOW をご覧になっている皆さん。ホームページに阪大 NOW のバックナンバーを掲載しておりますので、大阪大学のことを知る資料のひとつとしてぜひご覧ください。

（掲載ページアドレス：<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/press/now/index.html>）

（瀬尾）

アカペラサークル

~inspiritual voices~

楽器を使わずに声だけで作り上げる音楽。それが私達が日々打ち込んでいる「アカペラ」です。皆さんも「アカペラ」という言葉を一度は聞いたことがあると思いますが、ちゃんとアカペラを聴いたことがあるという人は少ないのではないのでしょうか。

実際、「口でドラムの音だすやつ?」「ゴスペルと何が違うの?」などと聞かれることが多いです。もちろん、間違いではないのですが、本当はもっとジャンルの幅が広く、テレビなどでよく耳にする J-pop の曲はもちろん、洋楽 Rock、Jazz、童謡...など、どんな音楽でも楽器を使わなければそれは「アカペラ」なのです。アカペラとは一つの演奏形態であって、どんな曲をやっても声だけでやればそれはまさに「アカペラ」となります。

大阪大学アカペラサークル inspiritual voices は現在もプロとして活躍されているアカペラグループ「INSPI」が創ったサークルで、今年で創部 10 年目になります。創部当初は 10 人にも満たない人数でしたが、今ではサークル員が 100 人を超える大きなサークルに成長しました。

私達が行っているサークル全体としての活動は主にまちな祭、いちよう祭での屋内、野外、およびメインステージでのライブ、また大学外での大きなホールを借りて行うサークルライブなどがあります。このようなライブについては聴きにきていただくお客様に満足してもらえるように、

「声だけで作り上げるハーモニー」



練習会やミーティング、宣伝活動を積極的に行い、サークル員全員が一丸となってライブを作り上げます。

また、日々の活動としては 4 ~ 7 人くらいで構成される「バンド」ごとに練習をして、他大学のアカペラサークルのバンドと一緒にライブをしたり、営業依頼を受けて歌ったりとさまざまな場所で活動しています。

いろいろと紹介してきましたが、アカペラサークルの一番の売りは、楽器を使わない手軽さだと思います。人数さえ集めればいつでもどこでもすぐに歌うことができます。歌が好きな仲間と輪になって歌っていると本当に楽しいです！

歌好きの人には自信を持ってオススメできるサークルです。



渉内 岩崎英洋(基・2年)

コメント
アカペラに興味を持たれた方は是非一度聴きにきてください!!



練習場所：大学内のいたるところでやっています。
練習日時：バンドごとに予定を合わせるので決まった時間というのはありません。
部員数：2007 年 10 月現在、1 回生から院生・社会人を含め 120 人くらいいます。
連絡先：connect-into@mail.goo.ne.jp
(サークルの渉内へ届くようになっています。)
部活 HP：http://ivoices.s59.xrea.com/

「箕面キャンパス校名看板除幕式」

10月1日(月)、新たに誕生した大阪大学箕面キャンパス正門に、「大阪大学」の校名看板を新たに掲げ、除幕式を行いました。

この除幕式には、鷲田清一総長、西田正吾理事・副学長、小泉潤二理事・副学長、杉本孝司外国語学部長、高橋 明世界言語研究センター長、奥西峻介日本語日本文化教育センター長が出席し、大阪大学の新たなキャンパスの船出を祝いました。



左から、小泉理事・副学長、西田理事・副学長、鷲田総長、杉本学部長、高橋センター長、奥西センター長



阪大 NOW No.99 2007 10月号 2007年10月26日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7166
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp